学内広報

2022.4.22 no.1557

令和４年度学部入学式より

UTokyo Diversity&Inclusion

志ある卓越。東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

令和4年度役員等の紹介
令和3年度卒業式・学位記授与式
令和4年度学部入学式・大学院入学式
D&Iキャンペーン2022のロゴを使おう!

令和4年度役員等の紹介

総長

藤井 輝夫

理事・副学長

相原 博昭
経営企画、財務、社会連携・産学官協創
未来社会協創推進本部、目標・計画、財務経営本部、資産活用推進、東大基金、WPI、国際高等研究所、IPC

大久保 達也
総務、施設
危機管理、会議、GX推進、施設長期戦略、技術組織整備、コロナ対応、FUSIONフィールド、国際オープンイノベーション機構

齊藤 延人
研究、懲戒、病院
研究推進、教員人事、大学院教育改革、病院経営改革、人事制度改革（研究支援）、環境安全衛生、図書館、総合研究博物館

太田 邦史
教育、情報
学術長期構想、DX推進、入試企画、教育運営委員会、PEAK、IR、ランキング、国際卓越研究大学構想

藤垣 裕子
学生支援、入試・高大接続、評価、研究倫理
学生委員会、学生懲戒、奨学厚生、学生就職、学生スポーツ調整、評価、教員情報、科学研究行動規範

林 香里
国際、ダイバーシティ
グローバルキャンパス、GLP、ハラスメント防止、バリアフリー、相談支援

理事

今泉 柔剛
事務組織、法務、人事労務、コンプライアンス
組織能力向上推進、人事制度改革（事務）、情報公開、業務改革、情報セキュリティ、内部統制

石井 菜穂子
経営改革特命
SDGs、グローバル・コモンズ

岩村 水樹
総長ビジョン推進
コミュニケーション機能強化、組織能力向上

監事

吉田 民

棚橋 元

執行役・副学長

大澤 裕
ガバナンス改革、利益相反、監査
コンプライアンス総括補佐

岸 利治
環境安全、キャンパスGX、研究力強化
環境安全本部、総合技術本部

佐藤 健二
学術資産活用戦略
文書館、高大接続センター、周年事業、総長ビジョン

武田 洋幸
コミュニケーション機能強化推進、入試改革
広報戦略本部

津田 敦
社会連携推進
渉外・卒業生、地域連携、体験活動、FLY、EMP

渡部 俊也
産学連携
産学協創、ベンチャー育成、リカレント教育改革、安全保障輸出管理

副学長

浅見 泰司
オンライン教育、キャンパス長期構想、大学総合教育研究センター

伊藤 たかね
ダイバーシティ教育

大橋 弘
人文社会科学組織連携

坂井 修一
図書館

関村 直人
国際特命、Tokyo Forum、Global Navigation Board

丹下 健
卒業生、地域連携推進、協創活動運営

矢口 祐人
グローバル教育推進

吉村 忍
産学協創推進

副理事

稲垣 博明
協創活動企画調整、イノベーションコリドー

遠藤 勝之
研究倫理、研究費・研究不正対応

蔭山 達矢
教育・学生支援

戸張 勝之
経理・調達

松井 正一
ダイバーシティ推進

水上 順一
情報システム

山本 貴史
SDGs・社会実装

総長特別参与

沖 大幹
ネットゼロカーボン戦略、GX国際連携

喜連川 優
DX推進戦略

坂田 一郎
FSIビジョン形成

佐藤 岩夫
ガバナンス改革推進戦略

総長特任補佐（副学長待遇）

森 初果
放射光施設、先端計算科学・量子技術推進、イノベーションコリドー、国際協創

総長特任補佐

有馬 孝尚
財務改革、総長ビジョン検討、IR

五十嵐 圭日子
社会連携・産学協創推進

稲見 昌彦
国際卓越研究大学構想検討、図書館DX推進

内田 寛治
新型感染症対応

大越 慎一
大学院改革

小山 博史
DX戦略・研究力強化

川﨑 雅司
研究力強化推進

佐藤 仁
GX国際連携推進、国際広報戦略

高橋 浩之
イノベーション戦略

津本 浩平
産学協創・研究力強化

中尾 彰宏
次世代サイバーインフラ活用

中村 宏
情報基盤活用

ペニントン マイルス
GX国際連携推進、リカレント教育戦略

松田 陽
学術資産活用推進、国際広報戦略

横張 真
キャンパス計画

吉江 尚子
男女共同参画

渡邉 聡
国際連携推進

渡部 雅浩
GX国際連携・教育推進

割澤 伸一
産学協創・社会連携推進、イノベーションコリドー推進

新役員等の略歴と就任の挨拶

新理事・副学長、新執行役・副学長、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を掲載します。

伝統を活かして新しい事業に挑戦

理事・副学長
太田邦史
OHTA Kunihiro

昭和60年3月　本学理学部生物化学科卒業
平成２年３月　本学大学院理学系研究科生物化学専攻博士課程修了、理学博士
平成２年４月　日本学術振興会特別研究員
平成３年４月　理化学研究所・研究員
平成12年4月　理化学研究所・研究ユニットリーダー
平成12年8月　理化学研究所・副主任研究員
平成18年4月　理化学研究所・太田遺伝システム制御研究室・准主任研究員
平成19年4月　本学大学院総合文化研究科・教授
平成28年4月　本学総長補佐
平成29年4月　本学大学院総合文化研究科・副研究科長
平成30年4月　本学総長特任補佐（IR担当）
平成31年4月　本学大学院総合文化研究科長・教養学部長
令和３年４月　本学執行役・副学長
専門分野　分子生物学、合成生物学
研究内容:1) H. Seo他5名, “Rapid generation of specific antibodies by enhanced homologous recombination” *Nature Biotech.*, 23:731(2005). 2) K. Hirota他5名, “Stepwise chromatin remodeling by a cascade of transcription initiation of non-coding RNAs.” *Nature*, 456:130(2008).
趣味：テニス、芸術鑑賞

藤井総長のもと昨年度にUTokyo Compassが発表され、その着実な遂行が求められる段階になってきています。私自身の関わる項目だけでも、DXや教育・入試等の改革、文理の垣根を越えた新しい学問・教育の展開など、多くの課題が目白押しです。折角行う挑戦ですので、本学のステークホルダーのwell-beingにつながるようにしたいと考えています。その実現は一人でできることではありませんので、教職員・学生の皆様との協業が不可欠です。今後皆様のお力を借りることが多々あると思いますが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

この度、教育、学術長期構想、DX、IR、ランキング、入試企画、PEAKなどを担当する理事・副学長を拝命いたしました。担当する領域が広範囲にわたっており、しかも新規事業もかなり含まれています。東京大学は伝統のある大学ですので、昔から引き継がれている良き伝統を守り、さらに活かしていくことが求められます。他方、VUCA社会と呼ばれる激動の時代において、同じことを繰り返しているだけでは、組織として生き残ることも難しいというのが現実です。良き伝統を守りつつ、新しいことにチャレンジしていく攻めの姿勢も求められていると思います。

「新しい大学モデル」にふさわしいガバナンスの実現

執行役・副学長
大澤 裕
OSAWA Yutaka

昭和62年3月　本学法学部卒業
昭和62年4月　本学法学部助手
平成2年10月　名古屋大学法学部助教授
平成11年4月　名古屋大学大学院法学研究科助教授
平成12年4月　名古屋大学大学院法学研究科教授
平成19年4月　本学大学院法学政治学研究科教授
平成28年4月　本学大学院法学政治学研究科副研究科長
平成31年4月　本学大学院法学政治学研究科長・法学部長
専門分野：刑事訴訟法
研究内容：1) 大澤裕「刑事訴訟における『択一的認定』(一）～（四・完）」『法学協会雑誌』109巻6号（1992年）919 - 975頁、111巻6号（1994年）822 - 892頁、112巻7号（1995年）921 - 982頁、113巻5号（1996年）711 - 782頁　2) 大澤裕「ロッキード事件最高裁大法廷判決再考―その証拠能力判断」『井上正仁先生古稀祝賀論文集』（有斐閣、2019年）525～544頁
趣味：学生スポーツ観戦、散策と自然観察

法学政治学研究科長在任中は、「総長選考会議の組織検討タスクフォース」及び「総長選考会議の組織検討ワーキンググループ」のメンバーとして、また、2021年度総長選考会議の学内委員として、本学のガバナンス上重要な位置を占める総長選考会議（現在は、総長選考・監察会議）の組織・運営両面に亘る改革に取り組みました。その経験も活かしつつ、微力ではありますが、任務遂行のため努力してまいりますので、どうかよろしくお願いいたします。

このたび、執行役・副学長を拝命しました。ガバナンス改革、利益相反、監査を担当します。

東京大学憲章は、「学問の自由に基づき、真理の探究と知の創造を求め、世界最高水準の教育・研究を維持・発展させること」を本学の目標として掲げ、憲章が掲げる理念・目標を現時の本学として確認・具体化したUTokyo Compassは、上記の目標を受ける形で、「学問の自由に基づき、真理の探究と知の創造を通じて世界の公共性に奉仕する大学を支える基盤として、構成員の自律的かつ持続的な創造活動を拡大するための『大学ならではの経営モデル（新しい大学モデル）』を確立する」との方針を示しています。私に与えられた任務は、ここに謳われた「新しい大学モデル」に基づく「公共を担う経営体」としての大学にふさわしい透明性と合理性を備え、「構成員の自律的かつ持続的な創造活動」の拡大とともに、「社会からの信頼」「支持と共感」の獲得・増進に資するガバナンスの実現にあると理解しています。

巨大組織を支える活動の継続と改善

執行役・副学長
岸 利治
KISHI Toshiharu

平成２年３月　本学工学部卒業
平成４年３月　本学大学院工学系研究科土木工学専攻修士課程修了
平成５年６月　本学工学部助手
平成8年11月　本学大学院工学系研究科講師
平成11年5月　本学大学院工学系研究科助教授
平成12年5月　本学生産技術研究所助教授
平成21年8月　本学生産技術研究所教授
平成27年4月　本学生産技術研究所副所長
平成30年4月　本学生産技術研究所長
令和３年４月　本学副学長
専門分野：コンクリート機能・循環工学
研究内容：1) Ueda, Hiroshi., Sakai, Yuya., Kinomura, Koji., Watanabe, Kenzo., Ishida, Tetsuya. and Kishi, Toshiharu. "Durability design method considering reinforcement corrosion due to water penetration." *Journal of Advanced Concrete Technology* Vol. 18 (2020): 27-38.
趣味：旅行、風流

このたび、環境安全、キャンパスGX、研究力強化担当の執行役・副学長を拝命いたしました。TSCP（UTokyo Sustainable Campus Project）、総合技術本部の担当も継続します。環境安全本部は、教育研究活動における安全衛生の確保、事故災害の防止、安全意識の向上等に取り組んでいます。昨年度の活動を通して、環境安全を支える活動は、夜間・休日を問わない対応が求められることを認識しました。今年度の主要な課題は、火災の発生抑止と火災発生時の適切な対応の徹底に向けた取組みの強化です。2008年より機器の高効率化改修等に取り組んできたTSCPは、本学が国際キャンペーン「Race to Zero」に参加したことを受けて新たな局面を迎えます。キャンパスGXを支える活動として、その重要度は増しています。総合技術本部関係では、技術職員組織化検討WGの下に設置されたTFにおいて、総合技術本部の活動に上席技術専門員に参画いただくことや、スキル向上や視野の広い人材育成のための人事交流の必要性などについて意見交換を行いました。今年度は、その実現を進めます。研究力強化についてはこれからですが、2月末に開催されたUTRA※シンポジウムに参加して、技術組織とURA組織の連携の可能性を感じました。微力ではありますが、着実な改善を心掛けてまいります。引き続きよろしくお願いいたします。

※東京大学 URAネットワーク

人文学・社会科学発の新しい試みを

副学長
大橋 弘
OHASHI Hiroshi

平成５年３月　本学経済学部経済学科卒業
平成12年6月　ノースウエスタン大学経済学博士課程修了、経済学博士
平成12年7月　ブリティッシュ・コロンビア大学商学・経営学助教授
平成15年6月　本学大学院経済学研究科助教授
平成24年4月　本学大学院経済学研究科教授
令和２年４月　本学大学院公共政策学連携研究部長・教育部長、本学大学院経済学研究科教授
専門分野：産業組織論、経済政策
研究内容：1) 大橋弘『競争政策の経済学』日本経済新聞出版、2021年　2) 大橋弘（編著）『EBPMの経済学：エビデンスを重視した政策立案』東京大学出版会　2020年
趣味：スポーツジムでのエクササイズ

この度、副学長を拝命し、人文社会科学組織連携を担当することとなりました。どうぞよろしくお願いします。

公共政策大学院院長を２年間務めました。社会科学や科学技術など異なる分野が接合する公共政策学という学問領域を、日本人学生だけでなく、留学生や社会人にも提供してきました。

公共政策学を支える３つの主要分野（法律・政治・経済）も、一括りに論じることは容易にできないと、これまでの２年間で痛切に感じてきました。各分野で、学習達成度に対する考え方が大きく違うばかりか、この違いは個々の教員の判断の違いというよりは、各分野の先生方の間で形成される共通認識としての違いであることも肌身で感じたところです。

翻って、人文学・社会科学は、現代に生きる私たちが暮らす社会・経済・文化と遊離した存在ではあり得ません。終息が見通せないコロナ禍や、深刻化する地政学的な対立を目の当たりにし、またデジタル技術の急速な発展によって大量の質的・量的データが容易に入手可能となっているなかで、人文学・社会科学の研究手法にも新しい試みが始まっています。こうした新たな試みのきっかけは、異分野からの視点や発想が持ち込まれることも多くあると思います。理系分野さえも巻き込んで、連携したくなるような人文学・社会科学発の取り組みができないか……。難しいテーマですが、自分の研究にもひきつけながら、実験的な取り組みも含めて考えられたら、といま思っています。

留学のすすめ

副学長
矢口祐人
YAGUCHI Yujin

平成元年５月　Goshen College卒業
平成３年８月　College of William and Mary, Program in American Studies (MA)
平成11年12月　College of William and Mary, Program in American Studies (Ph.D.)
平成７年４月　北海道大学言語文化部専任講師
平成10年4月　本学大学院総合文化研究科助教授
平成25年12月　本学大学院総合文化研究科教授
平成30年4月　本学グローバルキャンパス推進本部国際化教育支援室長
令和元年４月　本学総長特任補佐
令和３年４月　本学グローバルキャンパス推進本部副本部長
専門分野：アメリカ研究、太平洋島嶼文化研究
研究内容：1)『奇妙なアメリカ』新潮選書（2014年）　2)『現代アメリカ講義』東京大学出版会（2020年）
趣味：散歩

私はアメリカ中西部にある小さな町の小さな大学を卒業しました。

留学当初は分厚い教科書が全然読めず、レポートを上手に書くこともできず、泣きたい日々でした。毎晩、「あぁ、今日も日本語を話さなかった」と思いながら眠りについていました。

それでも若いときの留学体験は、私のかけがえのない財産です。もっとも貴重な体験は、いろいろな学生との出会いでした。一歳上のティナはフェミニストで、私のお姉さんのように、アメリカの学生生活のイロハを教えてくれました。最初のルームメートのスティーブはサンクスギビングに彼の実家に招待してくれました。マサチューセッツの山奥の、こんなところに人が住んでいるのかという森の中に大きな家がありました。

留学生のイッサはパレスチナから来ていました。何も知らない私は「そんな国があるのかな」と思ってしまいました。ハイチ出身のミリアムやベリーズ出身のリンダはアメリカのカリブ・中米政策に批判的で、「アメリカン・エンパイア」という表現を教えてくれました。

自分の慣れ親しんだ言語、社会、価値観を離れ、異なる文化に身を置くのは大変なことでした。でも振り返るとそれは多様性の意義と対話の大切さを学ぶ絶好の機会でもありました。

残念ながら本学では国際体験のないまま卒業する学生が少なからずいるのが実情です。私はひとりでも多くの学生に、異文化との出会いがもたらす苦労と喜びを感じてもらうべく、グローバル教育の推進に努力して参ります。

世界の誰もが来たくなる大学へ

副理事
蔭山達矢
KAGEYAMA Tatsuya

平成17年10月　本部サステイナビリティ学支援グループ長
平成19年７月　本部研究機構支援課長
平成23年４月　農学系教務課長
平成25年４月　本部学務課長
平成28年４月　薬学部・薬学系研究科事務長
平成30年11月　教育・学生支援部次長
令和２年４月　社会連携部部長
研究内容：1) 平成15年科研費奨励研究「家庭内エコロジーサイクルのモデルプランの策定（生ゴミの再生堆肥による有機栽培）」
趣味：旅行、花火鑑賞、家庭菜園

このたび、教育・学生支援担当の副理事を拝命いたしました蔭山と申します。

本学の職員として、これまで教育・学生支援関係の業務を多く担当してまいりました。現在の学務システム（UTAS）の開発や総合的教育改革にも関わらせていただきました。

さて、藤井総長のUTokyo Compassの中には、多くの教育や学生支援の事項が掲げられております。それら目標に共通している「対話」というキーワードがあります。教員と事務職員の対話であり、また学生との対話であり、対話を深め生み出されるより良い在り方を推進することが、私の任務でもあると感じています。

国内外から多彩な学生を迎え入れ、未来を築く卓越した人材を輩出することが東京大学の使命であり、在学中に様々な機会や情報を提供すること、例えば、海外への修学等の機会や修学支援の体制を整えることが、UTokyo Compassの基本理念にある「世界の誰もが来たくなる大学」への一助になればと思います。

また、私自身、本学の体験活動プログラムにおいて、昨年度より「日本の伝統文化である花火について知り、花火について考える」というプログラムを担当させていただき、学生と共に活動しております。

教育・学生支援担当の副理事として、総長をはじめとした執行部と事務職員を結び、対話と共感が推進できればと思っておりますので、ご支援、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

多様な人材を活かしていくこと

副理事
松井正一
MATSUI Shoichi

昭和55年3月　東京大学採用
平成24年4月　本学生産技術研究所総務課長
平成27年4月　本学労務・勤務環境課長
平成30年4月　本学環境安全衛生部長、環境安全本部副本部長
令和２年４月　本学医科学研究所事務部長
趣味：早起きと体力づくり

このたび、ダイバーシティ推進担当の副理事を拝命いたしました松井と申します。

これまで人事事務に永く携わり、最近ではCOVID-19の対応に関する事務なども担当してまいりましたが、この2年間は、キャンパスの入構制限や密を避けるための様々な制限により、教育・研究にも少なからず影響がありました。

働き方においても出勤制限などがありましたが、在宅勤務や時差出勤などが推奨され、場所を選ばないオンライン等を活用した業務も浸透してきており、以前にも増して様々な働き方が可能となってきたところです。

働き方が多様化すると、人材の多様性を生むことになり、また、多様な人材が集まるだけでなく共存共栄することが重要であるとされています。このたびのUTokyo Compassにおいては、基本理念として「多様性と包摂性」が掲げられ多くの関連する取組みが既に実行もされてきております。更に具体的に推進するためには、制度や環境の整備等も欠かせないところですが、多様な人材を活かしていくためにも、構成員の皆さんの意識が大きな力となると考えております。

今回担当するダイバーシティ推進については、広く深い課題が多く潜んでいると感じておりますが、様々な取組みを推進していく中で、微力ながら努力してまいりたいと思います。また何よりも、各部局の皆さまのご理解とご協力も欠かせないところでございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

退任の挨拶

前年度で退任された執行役・副学長の挨拶を掲載します。

退任にあたって

前執行役・副学長　**佐藤岩夫**

3月をもって執行役・副学長を退任いたしました。藤井新総長の体制の最初の年に全学の仕事をさせていただき、大変充実し、私自身大きな刺激を受けた1年でした。

業務としては、大きく2つ、ガバナンス改革、監査、利益相反、コンプライアンスの関係と、研究力強化、人文社会科学組織連携の関係を担当しました。日常の業務のほかで印象に残っているのは、様々な立場で参加した、UTokyo Compass策定に向けた「研究」に関するWG、総長選考会議組織検討WG、大学ファンド・関連制度検討TF、サンフランシスコ宣言（DORA）署名検討WGなどの議論です。文系・理系にまたがる多分野の教員、そして職員が、多様な視点と意見を交差させながら、深みのある議論が行われました。大学構成員が、自分の研究に関心を持つのは当然ですが、それを支える環境や組織のあり方にも問題意識を持ち、真摯に議論する姿勢を持っていることは、学問の自由、大学の自治の基盤であり、本学の強みと改めて感じました。

お世話になった藤井総長、役員、本部事務部、全学の皆さまに心から感謝を申し上げるとともに、藤井総長の下、本学の益々の発展を願っております。

令和3年度学位記授与式

令和3年度学位記授与式が、3月24日（木）に、安田講堂において挙行されました。今年度の学位記授与式は、新型コロナウイルスの感染拡大防止策を講じた上、第一部と第二部の2回に分けて行われました。第一部は9時00分、第二部は11時15分に始まりました。式典は音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント ニ長調 K.136」の演奏後、総長をはじめ、理事・副学長、各研究科長並びに来賓の東京大学校友会宗岡正二会長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。藤井総長から各研究科の修了者代表に学位記が授与され、修了者に向けて告辞が述べられた後、来賓の宗岡会長から祝辞をいただきました。その後、修了生総代（第一部：情報理工学系研究科 包含（つつみ ふくむ）さん、第二部：新領域創成科学研究科 平野 利忠（みちただ）さん）から答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、修了者とそのご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞

本日ここに学位記を受け取られるみなさん、修了おめでとうございます。教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。2020年初頭から続いている新型コロナウイルスによるパンデミックのために、みなさんは、修士課程、博士課程、専門職学位課程の大半、あるいは最後の大事な2年間を制限の多いなかで過ごすことになりました。厳しい状況でも最善をつくし、学位にふさわしい研究を成し遂げられたみなさんの努力に敬意を表します。また、みなさんをこれまで励まし支えてくださった方がたにも、お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

本日もまた新型コロナウイルス感染症対策のため、この安田講堂に全員集まることはできませんでしたが、オンラインでつながっているみなさんと心をひとつに、修了を祝いたいと思います。

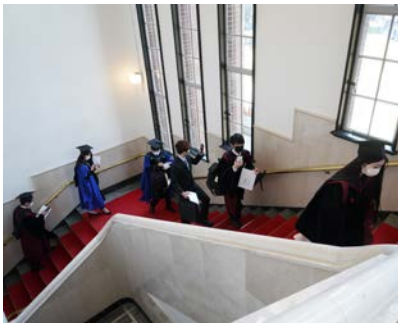
いま、社会はかつてない大きな変化と向きあっています。短期的には、新型コロナウイルス感染症拡大によって私たちの日常の生活にこれまで経験したことがない変容が起こっています。また、長期的には、気候変動問題の顕在化を前に、温暖化の抑制に動き出した社会の変革が避けられなくなっています。という、短期・長期の課題から本日の話を始めようと考えていましたが、もうひとつ平常時・非常時という別な視点が必要かもしれません。2月の終わりに突然起こった理不尽な軍事侵攻は、誰もが望んでいなかった破壊や悲劇、あたりまえの日常生活の喪失が大規模に、また強引に引き起こされてしまう、そうした世界秩序の脆さをあらためてあらわにしました。振りかえってみると、人類が経験した二回の世界大戦がわれわれに残した教訓は、「戦争の大義」のような単純化された説明を疑う自由の重要性であり、厳しい対立状況のなかでも対話や交流の実践が果たす役割の大切さでした。大学が学術の実践を通じて、こうした非常時が強いるさまざまな不幸からの脱却に、いかに貢献できるか。そして、東京大学は、いま困難のなかにある学生や家族や研究者や関係者のみなさんをいかに支援できるか。そうした問題もまた、まさに切実なものとして浮かびあがってきています。

さて長期的な課題に戻りますが、昨年11月に開催されたCOP26では、将来の温暖化を産業革命前の+1.5℃に留めるという目標について合意がなされ、国内外で脱炭素に向けて積極的なゲームチェンジが始まっています。本学も、カーボンニュートラルを大学として実現するための国際的な取り組みであるRace to Zero for Universities and Collegesへの参加を宣言しました。また、産学が連携して日本の脱炭素へのみちすじを作っていくためのプラットフォームであるETI-CGC（Energy Transition Initiative – Center for Global Commons）を設立し、COP26の会場と東京をつないでLaunchイベントを開催

しました。こうした変革の必然性を支える科学的根拠は、気候変動を自然科学的に評価したIPCC報告書にあります。昨年8月に公表された第6次評価報告書で、「人間活動が広範で急速な気候変化をもたらしてきたことは疑う余地がなく、今後数十年の間に温室効果ガス排出削減を強力に進めない限り、今世紀末までに温暖化レベルは+1.5℃および+2℃を越える」と結論づけられています。

こうした深刻な温暖化のメカニズムの解明を目指したパイオニアが、昨年ノーベル物理学賞を受賞されたプリンストン大学の眞鍋淑郎博士です。眞鍋さんは、本学理学部地球物理学科を卒業され、1958年に渡米、以来60年以上にわたって気候システムの数値モデリングに関する研究を続けてこられました。コンピュータの計算能力も限られていて、地球の気候を再現するなど、とてもできそうにないと思われていた当時、世界で初めて大気中のさまざまな高度におけるエネルギーの出入りと，対流による空気の混合を考慮した放射対流平衡モデルというものを開発し、それを用いて二酸化炭素濃度の上昇に対する気候の変動を物理学的に解き明かしました。これがノーベル賞の受賞理由でした。眞鍋さんの研究の方向性は本学にも受け継がれ、日本の気候変動研究の中核拠点として機能しているだけでなく、先に触れたIPCC第6次報告書にも国内最多の執筆者を送り出しています。

私は、眞鍋さんが受賞後のインタビューで「数値モデルで気候の研究をしたのは僕が初めてだからね」と述べられ、「面白くて仕方がなかった」と繰り返しおっしゃっていたことに感銘を受けました。これは、未知の領域に漕ぎ出し、楽しみながら前に進んでいくという、研究に取り組む上で、とても大事な感覚を言い表しています。そして、眞鍋さんは「研究を始めた1960年代には、温暖化がこれほど大きな問題になるとは想像もしていなかった。後に大きな影響を与える大発見でも、研究を始めた時にはその貢献の重要さに誰も気付かないものだと思う」ともコメントされています。それは、純粋な興味や好奇心の大切さを強調しているようにも思います。



ふりかえってみると、20世紀なかばに科学者が描いていたけれども、「そんなことは到底実現できないだろう」と考えられていた夢が、半世紀が経過した21世紀には次々に現実のものとなっています。 たとえば、DNAの二重らせん構造の発見という最初の研究の扉が開いてからわずか50年で、人間の設計図ともいえるヒトゲノムの配列解読が完了し、その全貌が明らかになりました。

先駆的研究者の好奇心と情熱が、同じ問いに挑む多くの人びとが共有する「思い」となり、研究の「場」が生まれ、領域横断的かつ世代を越えた探究へと発展したことで大きな成果に結びついたからだといえます。ヒトゲノム計画は、1990年に米国の政府主導のプロジェクトとして発足しましたが、当初、その達成にはもっと時間がかかるだろうと考えられていました。このプロジェクトの途上で、ゲノムを断片化してDNA配列を解読し、それらを正しい順序につなぎ合わせることによって、解読スピードを飛躍的に高める技術、これを実用化するスタートアップ企業がスピンオフします。このスタートアップが解読作業に参入することで、国際的な研究の「場」に加えて、競争的な環境が整うことになり、結果として当初の予定よりも数年以上も早く2000年6月にはドラフト配列が発表されるに至っています。

21世紀も1/5が過ぎた今、想像を超えると思われていた世界が現実のものとなるまでのスパンは、さらに短くなっています。新しい技術が一般の社会に浸透する、技術のオープン化による応用のスピードも急激に上がっています。生物の設計図を書き換える「組換えDNA技術」いわゆる遺伝子工学の開発は、ゲノム配列の全容解明など遠い話であった1970年代前半に始まりましたが、ゲノム編集技術の登場により、40年後の2010年代には配列を自由に書き換えられるようなりました。とはいえ、自由そして簡単にできてしまうことと、ほんとうに望ましいこととは違います。私たちは、その違いについて深く考えなければなりません。現代は、短い期間で成し遂げられた大きな技術の進捗が、急速に社会生活と結びつき、倫理的課題の検討や法的な整備が追いつかなくなってきた時代、ともいえるのではないでしょうか。

いま世界は技術だけでなく、それをめぐる倫理に関しても、未曾有の変化に遭遇しています。それらに向かいあい対処するためには、好奇心と責任感に駆動され、領域や国境をも超える自由闊達な研究が、いっそう重要になってきています。

地球規模で取り組むべき課題は、自然科学の分野に限られません。貧困や福祉、教育、ジェンダー平等など、たとえばSDGsが掲げる17の目標には人文学や社会科学の幅広い研究分野と自然科学の諸学問や技術が結びつくことでしか成し遂げられない目標が多く含まれています。これまで以上に包括的な「場」をつくる重要性、必要性が高まっています。翻って、現在の日本社会においてそうした活動を育む土壌が十分に形成されているかといえば、甚だ心許ない面もあります。そこには、長年にわたって形成された日本の初等中等教育の特質や、大学・大学院などの高等教育が直面している構造的課題、社会に出た後に研究や勉学を継続できる機会の少なさなど、複合的な問題が含まれます。

初等中等教育について、国際的な学習到達度調査からわかったことがあります。OECDが世界各国の15歳の生徒を対象として2018年に行った質問紙調査によれば、他の多くの国・地域に比べて日本の生徒は、失敗に対する不安が強い一方、学習への動機づけが弱い、ということが際だっていました。また、同じ年にOECDが小中学校の教員を対象として実施した調査によると、日本の中学校では生徒が学習に価値を見出せるよう手助けする指導を行っている割合が低く、また生徒の批判的思考を促す指導を行う割合が調査に参加した国の中で最も小さいという結果でした。高校や大学の入学者選抜で試される「学力」が重視されるなかで、指導も試験成績中心の画一的なものとなり、自らの関心に即して学び続けようとする姿勢が培われない傾向があるのだとしたら、これは根深い課題であると言ってよいでしょう。

高等教育についても、修士課程・博士課程

への進学者数の停滞の背後には、アカデミックポストの不安定化、大学・大学院での専門的な勉学や研究の成果を必ずしも適正に評価しない労働市場などの諸要因が絡まりあっています。社会人になってからの自己研鑽や、知識とスキルの更新あるいは転換の機会についても、先進諸国の中で日本の社会人がそれらを行っている比率は小さい、とも指摘され、民間企業によるいわゆる人材投資は縮減されているという報告もあります。

こうした諸問題の顕在化に対し、日本政府も事態の打開に向けて検討を始めています。その対策の一つが、生涯にわたりいつでも教育機関に戻って知識やスキルを更新する、「リカレント教育」の拡充です。とりわけ変化しつつある先端的な知識を得る機会として、大学や大学院での「学び直し」が重要になります。東京大学でも、「リカレント教育」について取り組むという方向性を、UTokyo Compassの中で示しました。

そもそも日本の大学入学者の平均年齢がほぼ18歳と、世界の中でもとりわけ若いこと自体が人生の中での時間配分の画一性のあらわれでもある、と言えます。高校卒業の直後に大学に入学し、大学卒業あるいは大学院修了の直後に就職して若い時期に教育機関を離れると、再び学校に戻って学び直す人の比率が先進諸国の中でも小さいのです。

このように人生の初期段階だけで学びを終えてしまうことは、もったいないというだけでなく、激動する世界の中にあっては、すでに難しくなってきているとも考えられます。つまり、旧来の学びのあり方も、いま変革期を迎えていると考えるべきです。いつでも何度でも、個人のそれぞれの関心や必要性に即して、社会と教育機関の間を行き来することにより、自分と社会を刷新してゆく、そのための制度改革や人生そのもののあり方の再構成が求められています。

UTokyo Compassが掲げている理念の基本は、ダイバーシティ＆インクルージョンです。ダイバーシティにはジェンダー、国籍、障害の有無など多様な側面が含まれますが、年齢や経歴の多様性もきわめて重要です。ライフコースのどの段階であっても、これまでの業務や経験がどのようなものであっても、集い、議論し、新たな知を追究することができる場、東京大学を色とりどりな人びとの間の化学反応・相乗効果が生じる「誰もが来たくなる」場にしていきたいと考えています。

ここにいるみなさんは、これからそれぞれの道に飛び立っていこうとしています。大学や研究機関で自分の研究を継続する人、民間企業や官庁へ就職する人、あるいは起業を目指す人など、どのような選択をしたにせよ、みなさんの頭の隅に置いておいていただきたいのは、大きな仕事は一人ではできないということです。課題解決型の研究開発や業務はもちろんのこと、curiosity drivenのシーズ型研究であっても、ヒトゲノム計画の例でもわかる通り、他者との協創が大きな成果をもたらします。そのための「場」は必ず見つかりますし、もしなければ自分で作り出すことに挑戦してほしいと思います。

その挑戦の過程で、さまざまな壁に直面したり、あるいは新たな関心が湧き出したりすることが何度もあると思います。そんなときにはいつでもそして何度でも、皆さんの関心に適した場所で、勉学や研究に心新たに取り組んでみるという選択肢を、どうか心に留めておいていただきたいのです。もちろん、皆さんの母校となる東京大学も、幅広い学問分野をカバーし、新たな挑戦に取り組む力をつけることのできる「場」の一つです。

絶えず自分を生まれ変わらせること、絶えず新しい何かに挑戦すること、はじめに述べたように私達がかつてない大きな変化と向かいあっている今ほど、その必要性が高まっている時代はありません。その中で、本日修了されるみなさんが東京大学という場をこれからも繰り返し活用して、みなさんが生きていく上での新たな糧を引き出し、まさに“Lifelong Learning”と表現されるような、学び続ける人生のすばらしさを感じてほしいと願っています。

本日は誠におめでとうございます。

来賓祝辞

東京大学校友会会長
宗岡正二さん

只今、ご紹介頂きました宗岡でございます。東京大学校友会を代表致しまして、本日学位記を授与される皆様方に心からお祝いを申し上げたいと存じます。また、修了生のご家族の皆様方にも、重ねてお祝いを申し上げます。本日は誠におめでとうございます。

まずもって、コロナ禍が長期化する中で、このように学位記授与式を開催することができましたことは、藤井総長はじめ学内の関係者の皆様方のご尽力によるものと心からの感謝を申し上げたいと存じます。また、コロナ禍のなかで、本日の晴れがましい学位記授与式に心ならずも参列が叶いませんでした多くの方々の無念さにも、私たちは思いを寄せなければなりません。

東京大学校友会は、2004年に発足した全学同窓組織であります。校友会の会員には、団体会員と個人会員とがあり、団体会員は、学部・学科・部局、運動部・サークル、国内外の地域ごとの同窓会などでありますが、個人会員は、存命の卒業生・修了生20万人、及び、すべての在学生、教職員であります。実は皆さんもすでに、東京大学への入学ないし東京大学大学院への進学の時点で、校友会の会員になっておられます。

校友会の目的は、「会員が相互に親睦、協力等の活動を行うこと」、そして「東京大学

の発展をグローバルに支援すること」であります。まず、「会員相互の親睦・協力」の最大の行事は、毎年秋に開催するホームカミングデイであり、同窓の仲間や大学との繋がりを感じて頂ける良い機会となっております。当日は、同窓生の再会のイベントも開催致しますので、10年後の2032年のホームカミングデイでは、是非皆さんに、修了10周年の学年会を企画して頂きたいと存じます。

また、第2の目的である「大学への支援」の一環として、東大校友会は近年、入学同期生向けのイベントや、在学生の進路選択・就職活動への支援に注力してまいりました。このような在学生支援に携わる「東大校友会サポーター」というボランティア制度があり、多数の卒業生・修了生にも登録頂いております。皆さんには、こうした形も含めて、今後社会で得られた知識や経験を、是非、大学や在学生へ還元頂ければと思います。

さて、皆さんはこれから、それぞれ新たな道を歩まれる訳ですが、今後の長い人生においては、想定外の環境変化に加え、仕事や研究における様々な課題に直面し、思い悩むことがきっとあろうかと思います。そうした皆さんの人生の様々な局面において、東大校友会のグローバルなコミュニティは、有益な助言やアイデアを提供できるものと思います。国内の各都道府県、及び、海外の35カ国・地域には、現地在住の卒業生・修了生による地域同窓会があり、会員同士の親睦や情報交換を行っております。今後、皆さんが、地方や海外勤務、海外留学をされる際には、是非、現地の地域同窓会にご連絡を頂きたいと思います。

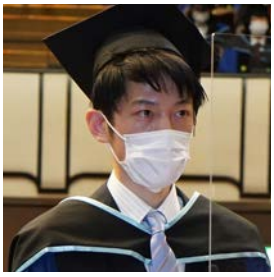
独立心が強いとも言われる東京大学の卒業生・修了生は、ひとたび大学という共通の場を離れれば、よく言えば独立独歩、ややもすれば、ばらばらになってしまいがちと言われて参りました。そうしたなかで、現在のように、あらゆることがグローバル化する時代において、今後は、東京大学の卒業生・修了生にも「スマートに群れる」ことが求められる、というお話を、昨年の学位記授与式においても、私から申し上げたところであります。

そして、昨年から今年にかけても、新型コロナウイルスのようなパンデミックの問題、気候変動・地球温暖化の問題、そして、ロシアによるウクライナへの侵攻に見られるような民主主義への挑戦や人権侵害の問題等々、いよいよ個々人の力では解決しえない、国境を越えた、かつ人類共通の課題が、我々の前に立ちはだかってまいりました。こうしたなかで、東京大学の卒業生・修了生の皆さんは、まさに「スマートに群れ」、グローバルに国境を越えた、知性と良識からなるネットワークを駆使して、高度な課題解決にあたることが一層求められてきていると思います。ぜひ皆さんには、今後も東京大学の仲間を大事にし、互いに高めあいながら、社会の発展に貢献して頂くことを期待したいと思います。東大校友会と致しましても、皆さんの力を結集し、ともに連係することのできるプラットフォームとしての役割を一層果たしてまいりたいと考えております。

東大校友会は発足以来17年間、着実に組織と活動を拡大してまいりましたが、今般、校友会としての財政的な自立を期し、会費の仕組みを導入致しました。本日配布の冊子にも記載しておりますが、卒業生・修了生と大学、また卒業生・修了生相互のネットワークをさらに強化し、皆さんに役立てて頂くためにも、是非皆さんには東大校友会の一員としてのご協力をお願いする次第であります。

最後に、重ねて皆さんの人生の門出をお祝い申し上げますと共に、今後益々のご活躍を祈念致します。改めまして、本日は誠におめでとうございます。

答辞



情報理工学系研究科
包 含さん

本日は先生方並びにご来賓の皆様のご臨席、また藤井総長、ならびに宗岡校友会会長からのお言葉を賜り、誠にありがとうございます。修了生を代表して、皆様に心より厚く御礼を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症下での学位記授与式も今年度で第三回目となりますが、まだ先の見えない感染状況の中にも拘わらず、ここ一年ほど国際情勢が大きく揺れ動いています。目立ったものだけでも、米国連邦議会襲撃事件にはじまり、ミャンマー国軍クーデター、アフガニスタンのタリバン政権復権、そしてまさに先月ウクライナにおいて軍事作戦が開始しました。これらの国際情勢は様々な歴史的要因が絡まった複雑な問題ですが、誤解を恐れずに言えば「価値観の相違と分断」がもたらした問題と言えるでしょう。また、感染症対策をめぐっても各国政府には感染状況と市民の自由のバランスをどのように取るのかという難問が突きつけられています。この問題も、公衆衛生と個人の自由という方向性を異にする価値観をどのように調和させるべきか、という形で換言できます。19世紀以降、通信・交通インフラ技術水準の飛躍的な向上に従って、グローバリズムが不可逆的に押し広げられてきました。現代社会の多くの問題は、個の活動範囲が急激に拡大してきたことによって個人や国家の価値観が相互対立している状況に起因しています。このように対立する価値観をいかに止揚するべきかは現代社会に生きる上で欠かせない課題の一つです。そこで僭越ながら答辞のこの場をお借りして、この問題にどう取り組むべきなのか、一研究者の観点から論じてみたいと思います。

大学院の間に私は計算機科学を専攻し、特に機械学習におけるコスト関数設計について研究してきました。一言で言えば、機械学習は過去の経験に基づいて知的な予測を行うモデルをコンピュータ上に実現する方法論です。予測モデルの実現には予測の正しさを定義するコスト関数を最適化しますが、モデルの評価尺度とコスト関数はしばしば乖離することがあります。言い換えれば、コスト関数を最適化しても必ずしも「良い」モデルが得られるとは限らないのです。私の研究は、具体的にはモデルの評価尺度、すなわちモデルの「良さ」の物差しが与えられたときに、それに応じて適切なコスト関数を設計することを科学的に試みてきました。しかし、「良い」モデルとは何でしょうか。近年は機械学習を取り込んだ人工知能技術が身近に用いられるようになっており、例えば SNS では利用者の好みに基づいた推薦機能が実装されていますが、狭いコミュニティ内で近しい意見同士が増幅してしまうエコーチェンバー現象の原因にもなりかねず、社会の分断を引き起こす可能性があります。このように、人工知能技術ないし技術一般の「良さ」の議論は価値観を問う難題です。私自身も研究する過程で「良い」技術とは何であるか長い時間悩んできましたし、現時点でも明快な回答を持っていません。

科学と技術について、著名な計算機科学者であり組版システムの TeX の開発者でもあるドナルド・クヌース氏は「自然科学とは私たちがきちんと理解し、コンピュータに教えることができる知識のことである。そうでないものは “art” が扱う範疇である」と述べています。この “art” という単語が曲者ですが、クヌース氏は「創意工夫や美的意識を要する技術的対象」を指して “art” と呼びます。しかし同時に、私は「芸術」や「人文学」の含意を意識していたのではないかと想像します。「良い技術とは何か」という問いは現代自然科学の範疇に収まらない、

所謂「トランスサイエンス」であり、そこに回答を与えるためには特定の専門家集団に閉じこもらずに別の専門家集団や市民とのコミュニケーションを行い、問題提起し、そして議論を深化させていく必要があります。クヌース氏の言葉に準えれば、芸術や人文学が自然科学の扱えない領域に挑戦する足掛かりとなると理解できます。

専門一辺倒にならずに領域を跨いでいくことで学問一般は社会に対して新たな価値観を創出していく力がありますし、同時に社会変革のためにその責務を果たさなければなりません。この視点を欠いたとき、学問的価値観はときに意図しない影響力を行使することがあります。卑近な例を挙げますと、19世紀科学の大黒柱であるダーウィニズムは当初生物学の文脈で提唱されましたが、同時期の知識人を大いに刺激し、生物学的進化論とはパラレルに社会体制もパラダイムシフトを通じて「進化」するのではないかと論じる社会進化論が現れました。本来は学究的な試みでしたが、次第に帝国主義をはじめとした現存体制の正当化に使われるようになったり、またイデオロギーや人種にも自然淘汰が起こるといった排外的価値観へと繋がったりした影響は無視できないでしょう。こうした科学的価値観の持つ危険性を先鋭に批判した一人が、20世紀のスペインの思想家であるオルテガです。オルテガは社会に対して自分の担うべき義務を認識せずにただ享受するだけの人間を「大衆」と呼んで批判しますが、その中でも特に科学者を「大衆」の典型例として取り上げています。なぜならば、19世紀後半から始まった学問の専門分化が過度に進んだことによって、多くの科学者たちが細分化された領域で満足してしまい、より根源的な人間らしい生を追求しなくなったからであると言います。オルテガの批判は先ほどの社会進化論の歪曲を止められなかったエリートらに対して当てはまるどころか、1世紀近く経った現代の我々にも未だに痛烈に響くものです。専門家だから、リーダーであるから、それゆえに尚更特定の価値観に固執してしまい、それがグローバル規模で起こった結果が、現代社会に跳梁跋扈する排他主義ではないでしょうか。

少々悲観的にグローバリズムの功罪のうち罪の部分を論じてきましたが、私はグローバリズムが持つ功の可能性を信じています。それは、これまで無力な存在とされてきた一市民がかつてないほど大きな影響を持ち得ることです。1世紀前ではおよそ信じられなかったほど、我々は日々世界中の人たちと密接に関わりを持ちながら生活しています。この傾向は感染症下においても情報通信技術を通じてより加速されていると言えるかもしれません。だからこそ我々は高い倫理観を持って人類レベルの課題に取り組まなければなりません。我々は様々な水準において隣人との対話を重ねてお互いの価値観を知り、同時に自らの価値観が正しいのかを常に問い続け、そして価値観の合意点を探る不断の努力を積み重ねていかなければなりません。未知の事象や価値観というのは往々にして畏怖の対象となるからこそ、科学者は好奇心を武器にして市民を先導する責務を持っています。これこそが真のリベラルアーツであり、市民的エリートの責務であると私は考えています。

最後になりますが、本日に至るまでの長い間、学問や研究への取り組み方において多岐にわたるご指導をいただきました諸先生の皆様、ともに切磋琢磨してきた友人の皆様、学生生活を多面的にサポートしてくださった職員、そして修了生を暖かく見守って下さったご家族の皆様に、修了生一同を代表して改めて心より感謝申し上げます。皆様の健康と東京大学の益々の発展を祈念しまして答辞といたします。本日は誠にありがとうございました。

答辞

新領域創成科学研究科
平野利忠さん

本日は新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中、式典を挙行していただきまして、修了生を代表して心より感謝申し上げます。また、藤井総長、宗岡会長より激励のお言葉を受け賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

私たち修了生は、各々が持つ興味に対して、日々論理的な思考を積み重ねることによって、真理を追い求めてきました。私は大学院では、血糖値の制御に必要なインスリン産生細胞に自己複製を誘導させることで、再生医療による糖尿病根治の可能性を提示しました。こうした成果が得られたのは、自由な研究活動を見守りつつも、的確にご指南いただいた先生方や、追い求める真理に対して心ゆくまで議論した学友に加え、東京大学の恵まれた研究環境のおかげです。

大学院での研究生活の第一歩は、先人たちが創り上げた「現在の常識」を理解し、探究すべき課題を自ら設定することに始まりました。古より築き上げられた知の体系は洗練されており、実際に研究課題を思案してみると、そのほとんどは既に行われていた研究であり、また実際に手を動かしてもその大半は上手くいかず、知の最先端を切り拓くことは容易ではないことを思い知らされました。

しかし、大学院での研究生活を通して、私たちの持つ知的好奇心こそが新しい成果を生み出す契機となり、知的好奇心に対して直向きに探究することで独創性が生まれることを強く認識しました。また先人たちもこの過程を繰り返し、知の創造を積み重ねることによって「現在の常識」が成り立っていることを実感し、私たちがその紡ぎ手として「未来の常識」を創出する一端を担うことができたことは、かけがえのない経験となりました。本日、学位を拝受した私たち修了生はそれぞれの道を歩みます。大学院生活で培ったこれらの経験を存分に発揮し、社会の発展に貢献できるよう、日々精進してまいりたいと思います。

現在、新型コロナウイルスの感染拡大やウクライナ情勢など、世界中は混沌としております。私たちも例外ではなく、日常と思われていたコミュニケーションや食事、娯楽が少なからず制限された日々を過ごしました。しかしながら、このような世の中であっても東京大学によるさまざまな支えによって多くの研究活動を勤しむことができたことは、感謝の念に堪えません。

最後になりましたが、本日までご指導ご鞭撻をいただきました諸先生方、共に切磋琢磨した同僚、先輩・後輩のみなさま、研究生活を支えてくれた家族に、修了生一同改めて感謝申し上げます。皆様のご健康、ご清栄と東京大学のさらなる発展を祈念しまして、私の答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

令和3年度卒業式

令和3年度卒業式が、3月25日（金）に、安田講堂において挙行されました。今年度の卒業式は、新型コロナウイルスの感染拡大防止策を講じた上、第一部と第二部の2回に分けて行われました。第一部は9時00分、第二部は11時15分に始まりました。式典は音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント ニ長調 K.136」の演奏後、総長をはじめ、理事・副学長、各学部長並びに来賓の東京大学校友会 宗岡正二会長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。藤井総長から各学部の卒業者代表に学位記が授与され、卒業者に向けて告辞が述べられた後、来賓の宗岡会長から祝辞をいただきました。その後、卒業生総代（第一部：教養学部 佐藤たまおさん、第二部：農学部 谷口裕香（ひろか）さん）から答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、卒業者とそのご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞

本日ここに学士の学位を取得し、卒業されるみなさん、おめでとうございます。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。みなさんをこれまで励まし支えてくださったご家族の方々にも、お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

本日、学位記を手にされ、研究に悩んだ日々や、仲間と交わした言葉など、思い出されていることでしょう。とりわけ、この2年間は、新型コロナウイルス感染症への対応に苦慮しながら、大学生活、研究を進めることになりました。その厳しい道のりを乗り越えてきたことに対してもお祝いを申し上げたいと思います。

本日もまた新型コロナウイルス感染症対策のため、この安田講堂に全員が集まることはできませんでしたが、オンラインでつながっているみなさんと心をひとつに、卒業を祝いたいと思います。

さて、みなさんのなかには、普段ついつい、歩きスマホをしてしまう人も、おられるのではないでしょうか。

なぜ、歩きスマホをしていると、しばしば人とぶつかりそうになるのか。その人が前をよく見ていないことが原因だと、誰もが考えるでしょう。しかし、すこし視点を変えてみると、歩きスマホは、その行為をしている当人だけでなく、周りの歩行者にも、じつは大きな影響を及ぼしていることがわかってきます。

本学・先端科学技術研究センターの西成（にしなり）活裕（かつひろ）教授とフェリシャーニ・クラウディオ（Claudio Feliciani）特任准教授は「歩行者が他の歩行者と衝突する理由」について研究していますが、この研究は2021年のイグ・ノーベル賞を受賞して、話題にもなりました。西成教授たちは、歩行者の集団の先頭の3人にスマートフォンを持たせて、計算問題を解きながら歩かせました。すると、歩きスマホをしている3人だけでなく、じつは集団全体の歩行速度が低下し、さらには集団の動きに乱れが生じることを発見しました。つまり、歩きスマホという行動が当人だけではなく、周りを歩く人びとの振る舞いにも影響を与えうる、ということが示されたのです。

ご存じのように「イグ・ノーベル賞」はノーベル賞のパロディで、「人々を笑わせ、考えさせた業績」に贈られるものですが、西成教授たちの研究の「問い」とその成果は、普段ついつい歩きスマホをしてしまう私たちも含め、都市を忙しく行き交う、世界中の「歩行者」にとって、普遍的な価値ある気づきを与えてくれるものではないかと思います。

さて、それでは「歩きスマホ」という「歩き方」はいつ生まれたのでしょうか。これは

スマートフォンという新しいガジェットがもたらした、いわば新しい「文化」であろうと思います。2007年1月に発表されたiPhoneをスマートフォンの原点だとすれば、わずかな年月でこの技術が世界中に浸透し、大きな利便性とともに、メールチェックやSNSに夢中になったがゆえの衝突・転倒・交通事故などの社会問題をもたらすことになったわけです。

私たちの毎日の生活は、テクノロジーの発達にともなって、ごく身近なところから否応なしに変わっていきます。その変化は、必ずしも予想した通りのものとは限りません。例えばこのパンデミックのなかで注目された「メッセンジャーRNA」ワクチンのように、日々起きるできごととの偶然の重なり合いによって、思わぬタイミングでひとつのテクノロジーに光があたり、社会に浸透することがあります。その一方で、当初は想定されていなかった問題を引き起こすこともあります。近年、現代的な病理と指摘されるようになった「ネット依存」も、テクノロジーの急速な発達と普及に、私たち自身が対応できずに生まれてきた、新たな社会問題でしょう。そうした意味では、テクノロジーがもたらす未来は、ポジティブにもネガティブにもなりうるのです。

今日の私たちの生活に浸透している技術、すなわちテクノロジーの代表的なものといえば、産業の現場だけでなく家庭での暮らしにも応用されつつあるロボット、そしてAIでしょう。「ロボット」という言葉は、チェコの作家カレル・チャペック（Karel Čapek）が1920年に発表した戯曲のタイトル「ロボット　RUR」に由来しています。ずいぶん昔のことになりますが、私自身、六本木の俳優座劇場での上演を見た記憶があります。もともと私が所属していた本学の生産技術研究所がまだ六本木にあったころのことです。

科学的空想（SF）、すなわちScience Fictionとして描かれた想像の世界が、作品発表から約100年が経過し、徐々に現実になりつつあります。作品の冒頭、ロボットがタイプライターを打ったり、人間と会話をしたりするシーンがありますが、機械による口述筆記や会話は、現代の音声認識システムの発展により実現しています。ディープ・ニューラル・ネットワークとその応用の進展が、第3次AIブームと呼ばれる動きを加速していることはご存じの通りです。

技術の進展が、よりよい生活を営みたいという人間の欲求に端を発していることは言うまでもありません。チャペックの戯曲でも、ロボット工場の取締役ドミンは、ロボットを製造することで人間を労働の苦役から解放したい、と述べています。さらに、そうした欲求を掘り下げていくと、未来への好奇心ともいうべきものに行き当たります。

昨年、他界された立花隆さんは、幅広い分野で活躍されたジャーナリストですが、1996年に本学の駒場キャンパスでも講義をされています。その際、「人間を進化の相で捉えること」（『サピエンスの未来』講談社現代新書、2021年）を提唱し、時間的に大きなスパンであらゆる物事を捉える大切さを主張しています。未来に向かう好奇心の連鎖は、さまざまな研究者が創りあげる協働関係によっても進化していきます。これは単にさまざまな分野の研究者が協働するという同時代的な面だけではありません。もう一方で、長い時間をかけ、世代を跨いで受け継がれていく好奇心の連鎖にも注目すべきでしょう。

テクノロジーの普及・浸透が、技術そのものの力だけではなく、それを受容する社会の状況に大きく左右されることも重要な論点です。コロナ禍で、誰もが知るようになったリモート会議システムは、1990年代以降、技術的にはすでに可能となっていましたが、必ずしも普及はしていませんでした。それが2020年のパンデミック以降、世界中で注目され、みなさんもリモートでの授業を経験することになったわけです。同時にこのようなリモート環境の構築は、移動が困難な、ハンディキャップを持っている方々から歓迎された一方、なぜ、これまで導入されなかったのかという疑問の声もあがりました。これは、技術の問題というより、そのテクノロジーを活用する社会と人間の側の問題であると言ってよいでしょう。

今日、ロボット掃除機、スマートスピーカーなどAIを搭載した機器を使うことが私たちの生活の一風景になってきていますが、その一方で、テクノロジーの未来に対する不安もしばしば聞かれます。自分の職業がAIに奪われてしまうのではないか、日常生活がすべて監視されてしまうのではないか、はては人間は不要な存在になってしまうのではないかという声も耳にします。しかし、人間の未来はポジティブにもネガティブにも変えうるもので、それを決めていくのは私たちだということを忘れてはなりません。

はるか昔のギリシア神話に暗示的な逸話が記されています。プロメテウスという神は天上にあった火を寒さに苦しむ人間に与えたことで、ゼウスによってカウカソス山に鎖でつながれ、毎日、鷲に肝臓をついばまれることになります。この「火」は技術の象徴とも捉えられ、人間に幸せをもたらすだけでなく、争いや災いを生じさせます。つまり、プロメテウスの悲劇は、自分の行動が及ぼす悪影響に思いが至らなかったことへの罰として解釈され、自分が生みだしたものが、後にどのような影響を与えるか、といった視点なくしては、良かれと思った行ないそれ自体によって未来永劫苦しむことになるという警告になっているのです。

もちろん、現代の科学者たちも、こうしたテクノロジーがもたらす問題への警告を無視してきたわけではありません。

1975年、アメリカ合衆国で開催された、通称「アシロマ会議」は、遺伝子組み換え技術の社会的影響を科学者自身が検討した会議として知られています。この会議では、当時、実現の可能性が見えてきた新技術について、そのガイドラインを作成しました。主催者の一人が、当時、遺伝子組み換えを牽引していたアメリカの生化学者ポール・バーグ（Paul Berg）であったように、科学者が進行形で取り組んでいる研究が将来的にもたらす可能性を検討したものでした。重大で不可逆的な影

響を及ぼすかもしれない危険性に対して、科学者みずからが検討した「予防原則」の事例である、といえるでしょう。

今、ヨーロッパを中心に「責任ある研究とイノベーション」(Responsible Research and Innovation）が議論されています。さまざまな方面からの問いかけに、責任をもって応答することが研究者にも求められています。ただ、こうした問いかけと応答は科学者のコミュニティ内に限られたものではありません。私たち一人一人の日常にも深く関わる問題だからです。

すでに身近な問題となった生殖補助医療について考えてみましょう。1978年に世界で最初の体外受精による子どもが生まれてから44年たった現在、日本では出生児のおよそ15人に一人が生殖補助医療により生まれています。

生殖補助医療は、英語ではAssisted Reproductive Technology（ART）といい、まさに人工的に生殖をAssistする「技術」です。本来女性の体内で起こる受精を体外で成立させ、子どもの誕生に至るまでの過程が可能となって以来、さまざまな改良が加えられ、進歩してきました。その後、この方法で誕生した女性たちがごく普通に出産する事例も数多く知られるようになり、最初に子どもを誕生させることに成功したロバート・G・エドワーズ博士（Robert G. Edwards）は、その業績により2010年にノーベル生理学・医学賞を受賞しています。

私自身も2000年代後半には、受精卵を良好な環境で培養するためのデバイスを開発する研究を行ったことがあります。ヒトへの応用も視野にいれつつ、基礎的な検討はマウスで、また家畜改良センターとの共同研究により、ウシの受精卵を使った実験などを行ったこともあります。このように生殖補助技術は医学、生命科学、工学そして畜産学などを含めた幅広い研究分野において進展し、ヒトだけでなくウシやブタの生殖においても利用されています。

さて、生殖の過程にさまざまな形で人の手を加えることができるようになると、その影響は単なる不妊治療にはとどまらない側面をもつようになります。卵子や精子の提供、あるいは代理出産という形で夫婦以外の第三者が関わる生殖技術の発達で、より多くの不妊原因が克服できるようになったと同時に、そうした医療を受けられる範囲も拡大します。実際、同性カップルや独身女性が生殖補助医療を受けて子をもつことができる国もあります。つまり生殖補助医療によって家族のあり方にも、かつては想定されなかったような選択肢が生みだされたわけです。

一方で、生まれた子が遺伝的なつながりのある親を知る権利や、身体的負担の大きい卵子提供あるいは代理出産の是非など、倫理に関わる課題が明らかになってきました。こうした課題にどのように取り組むかの議論も不十分なままに、受精卵の遺伝子を調べ、どの受精卵を子宮に移植するかを決めてしまう選別や、任意の遺伝子を改編した受精卵をつくることさえ技術的には可能になりつつあります。さらに、倫理規制の緩い国で先駆的な、つまり実験的な要素を含む生殖補助医療が実際に行われやすいという、いわゆる倫理ダンピング（Ethics Dumping)という問題も指摘されています。

社会全般に目を広げれば、テクノロジーを使う、つまり、ある技術を享受することには費用が伴います。デジタル機器を入手するときだけでなく、生殖補助医療を利用する際にも経済的なコストが生じ、それが負担できるかどうかで、先進的な技術を享受できる人とそうでない人の差を生みだしかねないのです。今日で言えば、新型コロナウイルス感染症のワクチン接種率の地域間格差の問題にも通じています。技術の利用を望みつつも経済的な理由で、その恩恵から排除されてしまう人たちを、どのように包摂するかという視点も忘れてはならないでしょう。

これまで触れてきた技術革新の出発点にあるのは、過度な労働を減らしたい、子どもが欲しいといった人間の欲求です。人間は欲求に突き動かされて、それを充足させるために、資源を消費し、新たなものを創りだしてきました。いま新たに、地球温暖化や、プラスチック等々の分解しにくい人工物質の増大、生物多様性の喪失など、人間が地球環境に及ぼす影響の大きさに注目して、「人新世」という新しい地質年代が提案されています。

近現代社会の発展の背後にあるのは、人間を尺度とする、いわゆる人間中心主義という意味でのヒューマニズムであり、これがさまざまな知の在り方を決定づけてきました。理不尽な差別や抑圧を批判する人権思想などは、まさにその大事な結実のひとつです。2月の終わりに突然起こった理不尽な軍事侵攻は、誰もが望んでいなかった破壊や悲劇、あたりまえの日常生活の喪失が広範に、また強引に引き起こされてしまう、世界秩序の脆さをあらわにしました。厳しい対立状況のなかでも対話や交流の実践が果たす役割の大切さを改めて見つめ直し、大学が学術の実践を通じて、こうした非常時が強いるさまざまな不幸からの脱却に、いかに貢献できるか。そして、東京大学は、いま困難のなかにある学生や家族や研究者や関係者のみなさんをいかに支援できるか。そうした問題もまた、まさに切実なものとして浮かびあがってきています。

長期的な視点にたてば、今後、重要となっていくのが、近代社会が確立してきた人権の普遍的な価値を、いわばポストヒューマニズムへと拡張していく視点でしょう。これは、人間以外の存在をも踏まえて、問題を探求する姿勢であり、端的に言えば、人間、サピエンスの立場を相対化するものです。その発想は、動物の権利を多角的に検討するアニマル・スタディーズ、または地球を主体として気候変動を考える視点にもつながるでしょう。さらには、戦争が破壊してしまう環境や自然の大切さや、生命のさまざまな営みの価値に、思いをいたすことにとも結びついていきます。

繰り返しになりますが、こうした議論は、その分野の研究者の狭いコミュニティのなかだけでなされるべきものではありません。産み出された科学技術は、われわれ自身の生き方にさまざまな影響をもたらします。だから

こそ、アカデミア、行政、市民といった立場の垣根を超え、さまざまな知を結集し、さまざまな声に謙虚に耳を傾け、「対話」を継続していくことがより一層求められていくでしょう。

本日、みなさんは卒業式という節目を迎えました。ですが、大学を卒業することで学びは終わるわけではありません。まだ解決されていない課題は多くあり、みなさんはこれからも数々の未知なる問いに出会うことでしょう。大学を卒業して社会に出る方、そして大学院に進学される方いずれも、そうした問いについてともに考え続けてくれることを願っています。

卒業、誠におめでとうございます。

答辞

教養学部
佐藤たまおさん

本日は、新型コロナウイルス禍にもかかわらず、私たち卒業生のためにこのような式典を開催していただき、誠にありがとうございます。また、藤井総長、宗岡校友会会長よりお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

1回目の緊急事態宣言が発出されてから、2年が経過しようとしています。2020年に後期課程に進学した私たちは、後期課程の大半を新型コロナウイルス禍で過ごしました。進学選択が終わり、本格的に専門分野の学びが始まるという時に疫病が蔓延しはじめ、授業の継続はおろか、世界中の人々が日々の生活にすら不安を覚えるような非常事態に陥りました。そのような状況でもタスクフォースが全国的にもいち早く動き出し、オンライン授業が開始したおかげで、私たちは学び続けることができました。

私は、前期課程で長崎県へフィールドワークに行き、農家の方々にヒアリングを行ったことがきっかけで、理科2類から人文地理学の道を志しました。文献や統計分析により地域への理解を深めたあとに現地に赴き、そこに息づく人々の暮らしに触れたことで、地域をより立体的に感じることができました。また、基盤整備事業を実施するために、地域の農家をまとめる旗振り役として尽力された農家の方や、実家の農業の経営判断をすでに任され始めている、自分とあまり年齢が変わらない農家の方のお話を聞いて、農村の活力を感じました。そこから、農産物の価格変動や農政、他の産地との関係など、農家の方々を取り巻く環境に、強く関心を抱くようになりました。

後期課程で予定されていた2回のフィールドワークは中止になりましたが、各地の農家の方に電話やZoomでヒアリングに応じていただきました。外出自粛による閉塞感から気持ちが落ち込んでいた時も、農家の方々が、経営に大きく影響を与える環境変化の中でも前を向いている姿に勇気づけられました。

来年度から私は、社会人として農業の支援に携わります。学生として経験した新型コロナウイルス禍は、窓の外で世界が大きく変わっていくのを部屋の中から眺めているようでした。非常事態に対応するために社会人の方々が必死に作ってくださった枠組みを享受し、その枠組みを無碍にしないようルールを守ることしかできない自分に無力感を覚えていました。しかし、これから社会に出ていく私たちは、これまで享受していた枠組みの作り手に回ります。この非常事態に伴って変化を余儀なくされている社会で、新たな常識の作り手となる責任を自覚し、本学での学びを存分に活かして邁進していく所存です。

最後になりますが、私たちの自主性を重んじてご指導くださいました先生方、この非常事態にあって私たちの学生生活を守るためにご尽力くださった職員の皆様、共に励ましあった友人たち、日々の生活を支えてくれた家族をはじめ、今日までお世話になりました全ての方々に、心より御礼申し上げます。皆様のご健康と、東京大学のさらなる発展を祈念し、答辞といたします。

答辞

農学部
谷口裕香さん

本日は、新型コロナウイルス蔓延による様々な制約の中、私たち卒業生のために、このような心温まる式典を催してくださり、誠にありがとうございます。ご多忙の中、諸先生方ならびにご来賓の方々のご臨席を賜りましたことに、卒業生一同深く御礼申し上げます。また、ただいま藤井総長、宗岡校友会会長よりお言葉を賜りましたことに、重ねて感謝申し上げます。

私は、前期教養課程を経て、農学部国際開発農学専修に進学し、農業開発と国際協力を学びました。幼い頃から環境問題と経済に関心があった私にとって、国際的な視点から、農学や開発経済が直面する課題についての学びを得たことは、大変興味深く貴重な経験でした。ただ、私たちの大学3年生、4年生としての生活は、入学当時思い描いていたものとは大きく異なりました。多くの実験や実習が中止になり、あるいはオンラインでの実施に変更され、肌で学問を感じる機会が少なくなったことは否定できません。しかしながら、そんな中でも先生方、職員の方々の迅速な対応と手厚い支えにより、充実した学業生活を送ることができました。卒業してからもこの感謝を忘れることなく、謙虚に学ぶ姿勢で歩んでいきたいと思います。

私たちが今持っている知識や経験は、自分の力だけで身につけたものではありません。周りの方々の存在やその支えがあってはじめて養われたものであることを、決して忘れてはいけません。この偶然にも恵まれた「学び」という平和の時間を、今度はそれを求めている人々のために捧げる努力をする必要が、私たちにはあります。社会が急速に変化し、情勢が不安定である現代には、各々の利害を超えて取り組むべき課題が山積しています。自己の利益だけを考えるのではなく、多様な価値観を受け入れ、隣にいる人、コミュニティに関わる人々、ひいては文化も考え方も異なる、地球に住む全ての人々のために、私たちは行動を起こさなければなりません。東京大学での学びを生かし、自分ができることに主体的に取り組み、難題に挑み続け、他者と協働し、課題解決の一端を担える存在になれるよう励みます。社会に貢献し得る人間になる決意を深く心に刻み、地球に住む生物の一員として、その使命を果たすことをここに誓います。

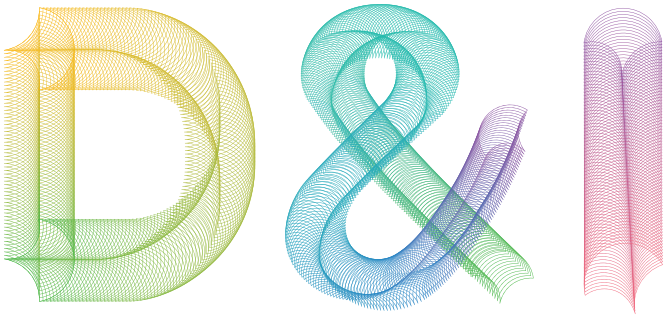
最後になりますが、本日までご指導、ご支援して頂いた諸先生方、職員の皆様、かけがえのない学生生活を共に過ごした友人たち、そして、一番近くで支え続けてくれた家族に、心より感謝申し上げます。皆様方のご健康と東京大学のますますの発展を祈念して、答辞とさせていただきます。

撮影：尾関祐治

UTokyo D&Iキャンペーン2022の ロゴ&シンボルを使おう!

東京大学は、基本方針「UTokyo Compass」が掲げる3つの基本理念「対話から創造へ」「多様性と包摂性」「世界の誰もが来たくなる大学」の下、誰もが生き生きと活躍できる魅力あるインクルーシブキャンパスの実現を目指しています。今回のキャンペーンはこの理念浸透と実現のための活動の一環として企画されました。ダイバーシティ&インクルージョン宣言（D&I宣言）の策定を進めるとともに、本学のD&Iに関する活動を可視化していきます。また、相互に交流する対話の場を設けるなどして、インクルーシブキャンパスの実現に向け、構成員自らが具体的な行動を起こすことを促します。

キャンペーンを企画したのは、昨年10月発足のCommunication Team（CTeam、Team長＝岩村理事）。国際女性デーに合わせてキャンペーンロゴを準備しました。「学内では様々なD&Iに関する取組が行われていますが、各々が別々に活動していて全体が分かりにくかったように思います。キャンペーンを通じてこれらを束ね、東大全体の動きとして可視化したかったのです」と語るのは、CTeamメンバーで広報戦略企画室長の菅野智子先生。CTeamでは関係部署と協力して総長対話を軸にした対話イベントを計画中です。「D&Iのロゴは、一つの定まったマークだけでなく、様々な形状に展開されています。この多様性に富むロゴを楽しく使ってD&Iを盛り上げましょう！」（菅野先生）。



←十分なサイズがある場合はカラーのロゴを

UTokyo
Diversity&Inclusion

↓十分なサイズがない場合は1色のロゴを

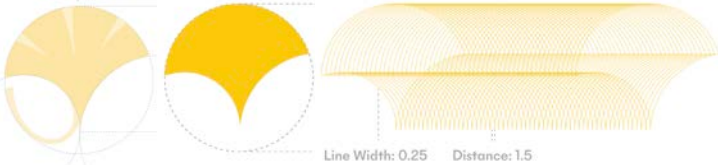
D&I
UTokyo
Diversity&Inclusion

担当デザイナーに聞きました

総長アドバイザー／Takram
田川欣哉さん

今回のロゴマークのデザインにあたっては「東京大学はこれから変化していく」という意志を、東京大学らしい爽やかな形で表現できないかと考えました。まず、東京大学のシンボルマークである二枚の銀杏の葉の形をモチーフに、それを少しずつ移動させながらつなぎ合わせることを試みました。これは、D&Iの取り組みが、一歩一歩は小さいステップだとしても、連続的に取り組んでいくことで結果としては大きな変化につながるということを表現したものです。また、このトランジションの中に色彩の変化も取り込みました。具体的には、東京大学のシンボルカラーであるイエローとブルーの色を起点にしながらも、既存のイメージを超えたカラフルな色域を加えることで、多様性を重んじるD&Iの思想を表現しました。このロゴマークは単体の形状で表現するものではなく、様々な形状に展開できるところも特徴です。ロゴマークが様々な場面で多様に形を変えながら使用されることで、多様性を尊ぶ考え方が、東京大学の内外に自然と浸透していくことを願っています。

（Designed by Takram／PD：田川欣哉／AD：山口幸太郎／D：半澤 智朗）



東大シンボルの銀杏がモーフィングして織りなす軌跡が、多様性に富む姿に変化する大学の姿を表現。

Zoomの背景や各種グッズとしても使えます

先日の総長対話では総長をはじめ多くの教職員がZoomの背景として使用していました

↑東大基金が寄付者への特典として作ったバッグ
←入学式ではD&Iロゴの動画が新入生を歓迎しました

D&Iキャンペーンのロゴと Zoom背景は本学構成員が自由に使えます。男女共同参画、バリアフリー、留学生・グローバルキャンパス、学生相談室、ワークライフ バランス、女子学生進学支援、ハラスメント対策、LGBTQ+などなどD&I に関連する活動を盛り上げるためにご活用ください。ロゴ使用にはUTokyoアカウントでの登録と使用報告が必要ですが、Zoom背景（全24種）の使用には手続きの必要がありません。趣旨に沿ったものであれば各種グッズや印刷物やウェブなどへの使用ももちろん可能です。詳細はUTokyo Portal>便利帳>本部広報課>2 ロゴマークを参照ください。

問：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

令和4年度 学部入学式・大学院入学式

令和4年度の学部入学式と大学院入学式が、4月12日に日本武道館において挙行されました。今年度の入学式は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて規模を縮小し、新入生のみの入場により挙行となりました。

午前の学部入学式には、約2,800名の新入生が出席しました。総長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓の映画作家 河瀬直美様、東京大学校友会 宗岡正二会長が登壇し、10時40分に開式となりました。式では、大学を代表して藤井輝夫総長から式辞が述べられ、続いて森山工 教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の河瀬様および宗岡会長からそれぞれ祝辞をいただきました。その後、入学生総代 呉徳朗（おおなるあき）さん（教養学部文科二類）による宣誓が行われ、12時に式を終えました。

午後の大学院入学式には、約2,300名の新入生が出席しました。総長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構 大栗博司機構長、東京大学校友会 宗岡正二会長が登壇し、14時20分に開式となりました。式では、大学を代表して藤井輝夫総長から式辞が述べられ、続いて星岳雄 経済学研究科長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の大栗機構長および宗岡会長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代 小野裕太さん（教育学研究科）による宣誓が行われ、15時30分に式を終えました。

式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、新入生のご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

令和４年度学部入学式総長式辞

総長
藤井輝夫

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。本学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。

みなさんは、COVID-19 のパンデミックをはじめ、さまざまな苦難に社会が直面する時代において本学の入試を突破し、この場に集っておられます。その努力に対し、心から敬意を表します。同時に、みなさんを支えてこられたご家族の方々、関係するみなさまにもお祝いをお伝えしたいと思います。

みなさんがこれから学びはじめる大学という場所は、一人ひとりのさまざまな可能性が多様につながり、育っていく場でもあります。現代では人びとをつなげ、ともに学ぶことを助けるテクノロジーも充実してきています。私たちは、世界中をつなぐ通信手段をもち、インターネットが「対話」の場を生みだし、自発的な学びが生まれていくという現代を生きています。本学においても、このパンデミックのなか、特に最初の一年間は、ほぼすべての授業がオンラインで開講され、世界中から学生が受講することになりました。地理的な制約を受けずに学べる可能性が、パンデミックによって、はからずも実証された側面があります。他方、オンライン授業が充実した反面、私たちはリアルなキャンパスの価値をあらためて実感することとなりました。 キャンパスは、出会いと対話、創発の場です。十分な感染対策を講じる必要はありますが、オフラインでも「大学」という場を活かし、さまざまな活動を展開することは可能です。多様な能力と可能性が存分につながれ、伸ばされる場となるよう、みなさんとともに考え、工夫していきたいと思います。

大学という場においてみなさんの多様な能力と可能性を尊重し、育んでいくことの大切さは、本学が取り組んでいる起業家教育の理念とも深くつながっています。本学が目指すべき方向について定めたUTokyo Compassのなかでも、東大関連ベンチャーの支援に向けた取組みを積極的に進め、2030年までにその数を700社にするという目標を掲げています。なぜ、私たちはいま、起業にスポットライトを当てているのでしょうか。

起業への注目は、本学が社会における大学の意義を問い、課題に粘り強く取り組む力、新たな解決への可能性を発想する力、そして他者と協力してそれを実現する力を育もうとしていることと深く関係しています。社会において求められる人材の多様化に合わせて、卒業後の進路も急速に多様化し、新たな事業を生みだす人の割合も増えています。東京大学は、社会が直面している課題の解決に貢献する新たな業を起こすことを支援しています。さらには現状ではまだまだ少ない、本学発の女性の起業家を数多く生みだしていくことにも、力を注いでいきます。

世界でも、既存の枠に縛られないスタートアップ企業のスピード感と実現力には、大きな期待が寄せられています。たとえば1990年代、ヒトゲノムの全塩基配列の解読に向けて、アメリカでは、NIH（National Institutes of Health）が主体となって公的な資金によるプロジェクトを進めていました。これと並行して、クレイグ・ヴェンター博士を中心とする研究者たちは民間に移り、新たにセレラ・ジェノミクスというベンチャーを立ち上げました。そこでの研究成果の公開原則と競争によるヒトゲノム解読の加速は、民間のスタートアップ企業が有する機動性や実現力を強く印象付けることになりました。しかし、その解読技術の中核部分は、もともと日本の研究者たちが開発したものでした。それゆえ、日本の科学技術政策の観点からは「ゲノム敗北」とも呼ばれています。アメリカのスタートアップ企業が担った役割を、日本の研究機関がなぜ果たせなかったのかについては、あらためて検討すべき課題ともいえます。まさにいま、大学や研究機関において開発された先進的な技術を実用化して、企業の利益のみならず、社会における大きな問題の解決に結び付ける、ディープテック型と呼ばれるベンチャーの支援が、強く求められています。

起業というと、会社を興して利益をあげることとイメージされがちですが、そうした理解は十分なものではありません。「会社」や「法人」についても、もうすこしその役割の基本から考え直す必要があります。明治時代に福澤諭吉が「会社」の必要性を論じたとき、そのポイントは営利や株式にではなく、異なる個人が力をあわせて事にあたるための対話や意思決定の仕組みづくりにありました。ここでは日本の近代が始まった明治維新前後に遡り、2024年からの新1万円紙幣にも描かれることになる渋沢栄一の「実業」について、取り上げたいと思います。

渋沢栄一は、近代日本の社会や経済の礎を築いた実業家で、設立にたずさわった金融・運輸・商工業等の会社組織、また教育・福祉・国際親善の諸機関などの社会公共事業の数は600を超えるともいわれています。渋沢における実業もまた、単に会社を起こして自己利益を追求する活動ではなく、それぞれの力を集めて公共性を担うものとして捉えられていました。そのことは、一般の資本主義とは異なる合本主義という理念の下で、社会全体のために公益を追求すべく人材や資本を集めて事業を推進する、そのことを説く『論語と算盤』などからも、窺い知ることができます。明治維新の後、それまでの封建社会にはなかったさまざまな新しい職業が生みだされていくなかで、新たな社会や経済の仕組みをどのように構築していくべきかが問われていました。まさにそうした時代の転換期において、渋沢は一つの思想的な道筋を示そうとしていたことがわかります。起業という営み自体は、20世紀以降における全く新たな潮流というよりは、むしろ日本の資本主義が形作られた原点に立ち返ることにも通じるものである、といってよいと思います。

もちろん、起業家には、リスクを取ってでも前進しようとする勇敢さやチャレンジ精神も重要です。経済学者のケインズは、それをアニマル・スピリッツと呼びました。経済活動を支える主観的で野心的な意欲は、不確実な状況下でも前に進む駆動力となります。その反面、危険を顧みない投機に走らせたり、他者を出し抜いたりという行動を引き起こす要因にもなります。ノーベル経済学賞を受けたアカロフとシラーは、投資家や起業家のアニマル・スピリッツの前提として、取引の安定性への期待や貨幣価値が不変であるという錯覚などと並んで、何らかのストーリーに従って思考しようとする「ナラティブ」の関与を挙げています。

原因と結果とを結びつける物語的な理解の形式であるナラティブとは、もともと文学研究の領域で発展した理論でしたが、いまでは広く臨床心理や教育・ビジネスの分野で使われています。それは人びとの認識の基盤となる「物語」であり、理解・思考・表現・対話等々の形式をつくりだしています。すなわちナラティブは、それぞれの個人の認識のなかで、世界のありかたそのものを規定し、社会のなかでどう行動することが望ましいのかという価値そのものを決めているわけです。人びとがつくりあげ、人びとの理解をしばる物語であるからこそ、また自分たちで変え、自分たちが考えるなかで別なナラティブを生みだしていくこともできます。臨床心理学の領域では、症状に苦しむ患者の理解を支配している物語のことを「ドミナント」なナラティブととらえ、その思いこみを解除する「オルタナティブ」な物語を、対話のなかで探ろうとします。「ナラティブ」とは、まさにそうした実践そのものだといってよいでしょう。

ITベンチャーをはじめとした起業が盛んな国々と比べますと、日本ではスタートアップ企業の少なさが際立ち、その背景事情の一つに「日本社会は、挫折や再起に対して冷淡

である」というナラティブがあるとされます。しかし、起業のような新たな取り組みにおいては挫折や失敗はつきものであり、そもそもそのような挫折の経験を物語として語ること自体にも大切な意味があります。本学では起業家教育に関する実際の取り組みとして、起業を目指す学生の相互交流や関連企業とのマッチングなどを目的とした各種のインキュベーション施設を運営するなどしています。みなさんも、少しでも関心があればぜひ勇気を出して、本学での起業をめぐるポジティブな語りと対話の輪のなかに、一歩足を踏み出してみて下さい。そこにはきっと、教室での学びとはまた違った新しい世界が広がっているはずです。

ベンチャーや会社設立を中心にすえた起業のナラティブのなかで、あまり強調されず、それほど光が当てられていない「ケア」との重要なつながりについて、最後にお話ししておきたいと思います。

起業とは、じつは社会に潜在的に存在するさまざまなニーズやウォンツを目ざとく見いだし、それに応えることができる製品やサービスを創り出すことにほかなりません。他者が何を望んでいるかを気づく、知る、それに応じて行動するという起業やビジネスの本質は、実は「ケア」という、もうひとつのことばが指し示す領域と深くつながっています。

「ケア」に関して、政治学者のジョアン・トロントは、*Who cares?* という秀逸なタイトルの本を著しています。Who cares? は、直訳すれば「ケアするのは誰か」という問いかけですが、英語圏の日常会話では多くの場合「知ったことか」という切り捨ての意味で用いられます。この「そんなことは知らない、ケアなどするものか」という姿勢が、尊大なマジョリティやエリートのなかに蔓延しがちであること、「自分たちが社会から自立して存在しているのだ」と考えるような危険なものであることを、トロントは批判的に指摘しています。その意味で「ケアレス」とは、単なる不注意によるミスなのではなく、関わりあわないと決めてしまっているがゆえの鈍感さや傲慢さなのではないか、常に自省が必要です。

トロントらのケア論を受けて学際的な研究者グループである The Care Collective（ケア・コレクティブ）が 2020 年に発表した「The Care Manifesto（ケア宣言）」は、ミクロレベルの人間関係から、地域・企業・コミュニティのメゾレベル、そして経済、政治、国家というマクロレベルにまでわたる、具体的なシステム変革の構想を掲げています。その冒頭では、パンデミック、気候変動、大量移民、紛争などを挙げ、現代の世界がいかに「ケアの危機」のなかにあるかを切々と語るとともに、「ケア」は私たち人間が地球上に生きるすべての生命とともに生き続け、繁栄することを可能にするものであるとも述べています。

新型コロナウイルス感染症拡大下で、医療をはじめ介護・保育などの、エッセンシャルワーカーの方々が懸命に繰り広げた、命と生活を守るための苦闘は、みなさんも記憶に新しいでしょう。しかし、労働条件という面では彼らが十分に報いられているわけではありません。市場的な利益が優先されてきたこれまでの社会システムにおいて、「ケア」の価値は残念ながら低く見積もられてきました。しかし、そのような従来の価値づけでは、すでに社会がたちゆかなくなっているということです。エッセンシャルなケアの価値を重視する体制への再編が不可欠になっています。

狭い意味でのケアワークの危機だけでなく、他者に関心を向け、配慮し、応答し、支えるという広い意味での「ケア」もまた、過剰な競争や排除がはびこる現代社会において危機に瀕しています。UTokyo Compass が掲げている「対話」も、他者への顧慮（ケア）なくしては成り立ちません。だからこそ、それを、ミクロな日常の実践や、あるいはメゾ・マクロレベルの事業として具現化してゆくことが重要になっているのです。

2 月の終わりに突然起こった理不尽な軍事侵攻は、誰もが望んでいなかった破壊や悲劇、あたりまえの日常生活の喪失が広範に、また強引に引き起こされてしまう、世界秩序の脆さをあらわにしました。この状況は、あらためて私たちに、日常的な対立がたかまって戦争にいたるのではなく、武力の行使という戦争状態こそが、互いの対立を強め、頑なものにするとともに、人びとの不幸や憎しみを増大させ、問題の解決をいちじるしく困難なものにするということを思い起こさせました。だからこそ、厳しい対立状況のなかでも対話や交流の実践が果たす役割の大切さをあらためて見つめ直し、大学が学術の実践を通じて、こうした非常時が強いるさまざまな不幸からの脱却に、いかに貢献できるか、という問いに向きあうことがいま求められているのです。

東京大学は、いま困難のなかにある学生や家族や研究者や関係者のみなさんを支援するため、特別受け入れプログラムを開設しました。同時に「東京大学緊急人道支援基金」を立ち上げ、支援の輪を広げつつあります。こうした取り組みはまさに、一人ひとりの学びや研究の機会を確保するための学術の立場からの「ケア」であり、世界に開かれ、かつ差別から自由な知的探求の空間を構築する、という東京大学の使命を果たすことにもつながります。

他者を顧慮（ケア）するということは、他者のためだけではありません。他者の立場に思いを馳せ、想像力を通じて他者の思考や感情を自らに引き受けるということは、実は自分の生を拡張することにつながっており、みなさん自身をより広く豊かにすることでもあります。異なる状況にある他者をケアすることは、みなさんにとっての「新たな可能性」すなわちオルタナティブを経験するということであり、それを事業にしていくということは、この社会全体にとってのオルタナティブ、すなわち新しいシステムを創り出してゆくことにほかなりません。

起業や実業は、単なる自己利益の追求にとどまるものではなく、経済活動を通じて他者へのケアを実践し、公共性や社会における連帯を担うものとならなければなりません。大学で学ぶことと、社会が必要としていることとの双方向性を理解し、その重みと責任を担える学生、職業人、そしてグローバルシチズン（地球市民）としてみなさんが活躍してくれることを心より期待します。

COVID-19 の世界的大流行により、この数年間、社会も大学も、急激な変化を経験し

てきました。そのような状況で大学生活を始めることについて、みなさんも少なからず不安を抱いておられることでしょう。しかし、このような社会情勢であればこそ、みなさんの才能を社会のなかでより良く生かしていくためのさまざまな選択肢があることを、常に心に留めておいて下さい。大学の中でも外でも、多くの可能性を持つ多様な人びとが存在することを、そしてそれら一つ一つの可能性がすべて尊いものであることを、忘れないでください。東京大学もまた、みなさん一人ひとりの個性とその可能性を最大限に尊重し、これからもみなさんとの対話と共感をさらに深めていきたいと考えています。困難な状況の先に広がる輝かしい未来に向かって、ともに歩んでいきましょう。

ようこそ、東京大学へ。

教養学部長式辞

教養学部長
森山 工

東京大学に入学されたみなさん、ご入学おめでとうございます。みなさんをこれまで支えてこられたご家族のみなさま、ご関係のみなさまにもお祝いを申し上げます。教養学部の教員と職員を代表し、みなさんを教養学部にお迎えできることを喜ばしく思います。

わたし自身のことですが、わたしは文化人類学という学術分野を専門としています。文化人類学というのは、自分が慣れ親しんできた文化とは異なる文化を、その全体性において理解しようとする学問です。そのために文化人類学者は、異文化のただなかに飛び込み、生活当事者たちと生活をともにしながら、その人々の言語や思考様式や行動様式を学びます。彼ら彼女らが自分や世界をどう意味づけているのか、そしてどう価値づけているのかに肉迫しようとします。これが現地調査、すなわちフィールドワークと呼ばれる営みです。

この学術分野が「文化人類学」と呼ばれているのはどうしてなのでしょうか。今も述べたように、この学問は確かに「文化」について研究する学問ですから、名前に「文化」が付いているのは理解できるでしょう。けれども「人類」のほうはどうでしょうか。「文化人類学」は、英語でCultural Anthropologyといいます。つまりAnthropology、まさしく「人類の学」であるわけです。この学問区分と学問名称は、主としてアメリカ合衆国において確立したものですが、それが第2次世界大戦後の1949年、新制東京大学の発足と同時に設置された教養学部に導入されたのでした。

「文化人類学」が「文化」と同時に「人類」を謳うのは、個々別々の「文化」を理解することを重要な目標としながらも、それを「人類」という枠組みに位置づけようとする志向性をもっているからにほかなりません。さまざまな個別の「文化」のあり方を探究することは、「人類」というものの文化的な多様性を示すことにつながるでしょう。個別の「文化」を理解しようとするのは大切ですが、そうした個別研究を積み重ねることで、「人類」が包摂している多種多様な「文化」のバラエティの豊かさを示すことができます。その一方で、そうした多種多様な「文化」を相互に比較して探究を深めることにより、「人類」というものがもつ文化的な統一性、あるいは文化的な普遍性が示されることにもなるのではないでしょうか。「文化」は相互に違っていても、そこに何らかの共通の基盤がある。そうであるからこそ、「文化」の違いがあるからといって、相互の理解が完全に不可能となるわけではないのです。相互の対話が完全に不可能となるわけではないのです。わたしたちは異文化を理解し、異文化と対話することができるのです。

ですからみなさんには、「文化」の多様性と同時に、その多様性の基盤にある「人類」というものに思いを馳せていただきたい。もちろん、「人類」はある生物学的な存在としてこの地球上に生まれました。そもそも地球が誕生したのが、今からおよそ46億年前のことだといわれています。その地球に生命が誕生したのが、およそ40億年前のことです。それから生命は進化を遂げ、多様化し、複雑化してきました。700万年ほども前には、ヒトの祖先とチンパンジーの祖先とが分岐する地点にいたります。40億年の生命の歴史から見れば、じつに最近のことです。もっと後の時代の20万年から10万年ほども前には、わたしたちがそうであるところのいわゆる現生人類（これをホモ・サピエンス・サピエンスといいますが）の祖先が地上に登場します。さらに、およそ1万年前には、新石器革命と呼ばれる技術革新とともに、人類が農耕や牧畜に従事しはじめ、生産経済の道が開かれるようになります。産業革命が起こって、わたしたちの生活に激変が訪れるのは、たかだか200年ほども前のことにすぎません。

こうして時代をたどってみると、人類とその内部での文化的な多様性というものを一つの展望のもとに把握することができます。そのような展望をもつことが、現代ほど必要とされている時代はありません。気候変動にしろ環境破壊にしろ、そしてわたしたちが現在直面している新型コロナウイルス感染症にしろ、これらは「人類」に対して突きつけられた課題ではないでしょうか。単一の国家や国民や、あるいはある特定の文化だけで、これらに対応することはできないのではないでしょうか。さらに、気候や環境や感染症など、自然の脅威にさらされるだけが「人類」ではありません。そこには人為的に引き起こされた脅威もあります。今この時点でますます緊迫化しているウクライナ情勢はどうでしょうか。これは人為的な政治情勢・軍事情勢・社会情勢ではないでしょうか。しかしそれにしても、ウクライナとロシアという二国間の関係だけに還元できるものではないのです。その背景にはさまざまな歴史的なアクターが関

与しており、そしてまたその解決には「人類」の英知が必要とされているのです。ここではまさしく「人類」が試練に立たされているのです。

人類を一つの展望のもとに把握することの必要性は、しかしながら、そのような展望を我がものとすることの難しさと表裏一体です。先ほどたどった時代を逆にたどってみましょう。今からおよそ200年というスケールで見れば産業革命があらわれ、ここ 1 万年というスケールで見ると農耕や牧畜が視野に入る。ここ10万年から20万年というスケールでは、ホモ・サピエンス・サピエンスの祖先の登場にゆきあう。さらに、ここ 700 万年というスケールで、ヒトの祖先とチンパンジーの祖先とが分岐する地点にいたる。

200年、1万年、20万年、700万年。こうした時間のスケールは、そのそれぞれを構想することにおいて想像力を要求します。それぞれのスケールの上でわたしたち人類という存在を構想することもそうです。さらに、今現在のみなさん一人ひとりが、みずからの存在をそうした多様な時間のスケールの上に位置づけることには、いっそうの想像力が必要となるはずです。たとえば、現在におけるわたしたちを、200年のスケールにあらわれる人類と関連づけること。現在におけるわたしたちを、1万年なり20万年なり700万年なりのスケールにあらわれる人類と関連づけること。わたしたちの一人ひとりが個人の生をそうしたさまざまなスケールに位置づけてみること。逆に時間のスケールを未来へと投げかけ、あるべきわたしたち人類の姿を描こうとすること。こうしたことにはさらなる想像力の働きが不可欠です。

フランスの文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースは、かつて次のように述べました。「世界は人間なしにはじまった。そして世界は人間なしに終わるだろう」。

このことばを、人類にとってのペシミズムととるか、それとも世界にとってのオプティミズムととるかは、受け止める人の価値観によります。けれども、「人類」を意識化することの重要性を、このことばは物語っています。さらに考えるべきなのは次のことです。先ほど逆にたどった時代をさらに遡ってみましょう。今から700万年ほども遡れば、ヒトの祖先とチンパンジーの祖先とが分岐する地点にいたりました。その先はどうだったでしょうか。今からおよそ40億年を遡ることによって、生命がこの地球上に誕生した地点にいたるのではなかったでしょうか。つまり、ここ40億年というスケールで見ることによって、生命が地球に誕生した地点が視野に入るのです。そうすれば、自己複製と微細な突然変異によって遺伝子が連鎖を紡ぐ40億年のプロセス上の一存在としてわたしたち人類が姿をあらわすことでしょう。みなさんの一人ひとりも、そうした40億年規模の生命のプロセスの途上にあるのです。だから、「世界が人間なしにはじまった」としても、その世界にあらわれた生命には人間へと連なるプロセスが孕まれていたのです。「世界が人間なしに終わる」としても、そこに生命が存在するかぎりにおいて、そこには人間から連なるプロセスも孕まれているのです。このように、さまざまな時間的なスケールを思い描くことで、そしてまた、それらのスケールにおける人類を含めた存在の連鎖を思い描くことで、想像力が試され、想像力が刺激されるさまを、是非とも楽しんでください。

わたしは教養学部前期課程をしばしば「迷宮」になぞらえます。教養学部はみなさんを「迷わせる」、ただしポジティブな意味で「迷わせる」ところだからです。みなさんは、たとえ漠然としたものであっても、何らかの関心に導かれて、本学に入学されました。けれどもみなさんは、教養学部においてそれ以外の多様な関心領域と出会うことになるはずです。当初の関心がそれによって相対化され、別の領域への関心が強くなることもあるでしょう。つまり「迷う」ことになるわけです。

みなさんが現時点でおもちの学術的な関心を、それが漠たるものであろうと明確化されたものであろうと相対化させること。自分が関心とする分野以外にも、文理にわたって広大な学術領域のいわば「沃野」があるというのを知ること。そして、その知の「沃野」のなかに自分の関心を位置づけてみること。さらにはそれによって、みずからの関心をいわばみずからの外側に立って見つめてみること。このような経験は、自己に単純に充足せずに、自己を外部に開き、自己を他者との関係において位置づける力の涵養に通じます。ですから、みなさんが教養学部で身につけるのは、全人的な意義をもった力であるのです。

この意味で「迷う」ことを恐れてはいけません。そこにおいては、みずからが当然視していた関心事や前提が根底から覆されるような経験がもたらされる場合もあるでしょう。自分という、ある意味でみなさんにとって完成の途上にあるものを積極的に他者にさらすことで、自己を安易な固定化に導かず、他者とのかかわりのなかで「揺らぎ」を感じさせること。これが「迷わせる」ということのポジティブな意義にほかなりません。

そのためには、自分や自分の関心のうちにのみ閉じこもるのでなく、他者の存在と他者の営みに対する想像力が不可欠です。ここでもまた、必要なのは想像力を羽ばたかせることなのです。前期課程での学びを通じて、さまざまなかたちでの想像力の作用を、それがみなさんにもたらすものを、どうか開拓し、楽しんでください。

ただし、「迷いっぱなし」では後期課程の進学先を決めることすらできないでしょう。教養学部前期課程では、みなさんを「迷わせる」とともに、その関心を改めて一つの方向に定められるようなカリキュラム上の工夫が講じられています。みなさんから見れば、「迷う」経験を経たからこそ、改めて定められる関心領域というものがあるはずです。「迷う」ことは、自分の「発見」や「再発見」に結ばれたものなのです。万が一にも「迷いっぱなし」になりそうになったら、そのときこそ「迷わず」、学生の話しを聞き、相談に乗り、アドバイスを施す学内組織を活用してください。駒場学生相談所や進学情報センターは、そのようなサポート体制を整えてみなさんを受け入れてくれます

教養学部前期課程でのみなさんの学びが、そして課外活動を含めたキャンパス生活が、実り豊かであることを祈念して、教養学部長としての式辞といたします。

祝辞

多くの困難を乗り越えて、この度の東京大学へのご入学、誠におめでとうございます。この約2年の間、コロナという未知のウイルスによって皆さんの日常が昨日までとは全く違う現実を余儀なくされることになりました。そんな中で今日という日を迎えられましたこと、大変悦ばしい時間を今、この瞬間、噛み締めておられるのではないでしょうか？

今日は、手放しでその喜びを全身に受けて、お過ごしください。

さて、そうはいっても、明日からの日々は、その喜ばしさに胡座（あぐら）をかいているわけにはいきません。かつてカンヌで、その年世界で一番これからを期待される新人に贈られる賞を受賞した時、フランス人の担当者が私に同じようなことを言ってくれました。今日はこのトロフィーを掲げて、大いに喜んでいればいい。けれども明日からはまた0から出発する。賞の上に胡座をかいていては、それ以上の成長はないのだと理解しました。

私は今年53歳になります。30年ほど先に生まれて、昭和、平成、令和の時代を生きてきました。この30年の人間社会の変化は凄まじいものでした。その関係の結ばれ方…とでもいいましょうか。ここで多くを語ることはしませんが、常識が覆されることの連続。かつてあった常識のどこを守り、どこを変えて生きてゆくのが最善であるのか、常に葛藤の中にありました。しかし、振り返ってみれば、守るべきものの継承は自身のルーツに大きく指針を得ていたことに気づきます。私の場合、生まれる前に両親が別居状態に入ったことにより、生まれてすぐに子供のいない初老の夫婦のもとに養女にもらわれ、育ちました。戦争を知っている彼らの生活は質素でしたが、謙虚であり、昇りくる太陽に感謝し、街角の石仏に手を合わせて祈りを捧げる。つまり「目に見えないもの」への感謝を欠かせない時代の人たちの暮らし。それを体現して育ちました。

あなた方と同じ年代の頃、私は「映像」に出逢います。そこで、8ミリフィルムカメラを手にし、街に自らを放り出すのです。初めてそれを手にした日のことは今でも鮮明に覚えています。この手の中でカタカタと音を立てて掻き落とされてゆくフィルムに、ファインダーから覗いた現実世界が焼き付いていくのを感じていました。昭和の終わり頃の光景。この角を曲がれば何が私を待っているのだろう。それは、まるで玩具箱をひっくり返したようにワクワクが止まらない。見るもののすべてを意識し、記憶に残したいと思った出来事でした。きっと私はあの時、なぜ自分がこの世界に誕生したのかを、悟ったのだと想います。それは、精神の誕生日ともいうべき、肉体の誕生から18年経ってようやく辿り着いた「実感」だったのです。皆さんにその「実感」は宿っているでしょうか？ 当たり前に思っていることの奥に「ものの真理」が隠されていることを信じて、突き進んでください。きっとこの先その真理に出会った時、世界に「名前」があることに感動を覚えるはずです。嘆くことなかれ。まだ見えていない世界との出会いは始まったばかり。この雲は次の瞬間どのように形を変えていくのだろう…と思うなら、その探究心こそがあなたの力です。ああ、なんて世界はすばらしいんだろう、この一瞬一瞬を永遠に刻みたい。と、私は、あの時、想いました。こぼれおちた過去に再び光を当てる魔法、映画の神様が私に舞い降りた瞬間の出来事です。

さて、私が皆さんと同じ歳だった頃、世界への扉はまだ少なく、開くことのできる窓も今よりは限られていました。ですから私が映像に出会った時、まるで乾いたスポンジが水を吸収するかのように、それに夢中になり、他のことには殆ど見向きもしない時間を過ごすことができました。しかし私も含め、平成、令和の時代の今、一つのことに集中して取り組むことがいかに困難か。私たちの周りにはとてもたくさんの「情報」が手に入り出しました。そしてその「情報」は瞬時に目の前にやってきて、そして次の瞬間には過去になっている。つまり扉は無限に私たちの目の前に広がりました。そのどれをとっても魅力的であり、どの道に進んでもまた別の道がある。というように、あなたの未来にいくつもの可能性を示唆してくれるようになりました。けれど、それは大きな罠でもあったようです。

映画作家
河瀬直美さん

ある映画人が私にこんなことを教えてくれました。たった一つの窓をずっと見つめ続けてください。若い世代には特にそのことがとても大切であることを忘れないでください。そのたった一つの窓から見える光景を深く考察してみてください。そうすればその窓の向こうにある「世界」とつながることができる。私はその言葉を頂いたときにとてもハッとしたことをよく覚えています。なぜなら、自分の部屋から見える窓の向こうの景色には「真理」が隠されているのです。そしてその「真理」を知ることで、結果的に世界中の人との出会いを豊かにします。それは他でもない自らの言葉でその真理を伝えることのできる自分でいられるからです。これこそがオリジナリティであり、他の人には真似のできない唯一無二のものとなります。

私の地元奈良の東大寺は華厳宗のお寺ですが、華厳の思想はこうした小さいものの中に無限の宇宙を見ることを説いています。一つの窓を見つめ続け生み出された一滴が、私の「世界の切り撮り方」として他の人たちの目に触れます。逆にいうと、それ以外のことから誰も判断してはくれません。だからこそ、小さくても自らのまなざしを獲得することはとても大切なのです。

今、世界はあるひとつのバランスを失って、かけがえのない命が奪われる現実を見ることとなりました。「戦争」を世界から無くしたい。その想いは映画を撮り始め、世界で上映される機会が増えた頃に願った気持ちでした。しかし、ひとつの映画で戦争は無くなりません。

残念ながら、世界は小さな言葉を聞いてくれません。そう思わざるを得ない出来事が起こっています。

先ごろ、世界遺産の金峯山寺というお寺の管長様と対話する機会を得ました。本堂蔵王堂には、山から伐ってきたままの大きな樹の柱が御堂を支えています。それらの樹は全て違う種類で、それはまるで森の中に自らが存在しているかのような心地になるとのことでした。なるほどその存在を確かめてみると、それぞれの柱がそれぞれの役割でそこにあって、どれひとつとして何かと比べられることなく、そこにきちんと自らの役割を全うしているようです。この世界観、精神性が今の自分に大きな希望を与えました。元来、宗教や教育の現場には、こういった思想があり、それを次の世代の人たちに伝える大切な役割があるのでしょう。あなたが今日ここにあって、明日から、かの大木の柱のように、しっかりと何かを支え、しっかりと何かであり続ける人であってほしいと願います。また、この管長さんが蔵王堂を去る間際にそっとつぶやいた言葉を私は逃しませんでした。

「僕は、この中であれらの国の名前を言わへんようにしとんや」

金峯山寺には役行者様が鬼を諭して弟子にし、その後も大峰の深い山を共に修行をして歩いた歴史が残っています。節分には「福はウチ、鬼もウチ」という掛け声で、鬼を外へ追いやらないのです。この考え方を千年以上続けている吉野の山深い里の人々の精神性に改めて敬意を抱いています。

管長様にこの言葉の真意を問うた訳ではないので、これは私の感じ方に過ぎないと思って聞いてください。管長様の言わんとすることは、こういうことではないでしょうか？例えば「ロシア」という国を悪者にすることは簡単である。けれどもその国の正義がウクライナの正義とぶつかり合っているのだとしたら、それを止めるにはどうすればいいのか。なぜこのようなことが起こってしまっているのか。一方的な側からの意見に左右されてものの本質を見誤ってはいないだろうか？ 誤解を恐れずに言うと「悪」を存在させることで、私は安心していないだろうか？ 人間は弱い生き物です。だからこそ、つながりあって、とある国家に属してその中で生かされているともいえます。そうして自分たちの国がどこかの国を侵攻する可能性があるということを自覚しておく必要があるのです。そうすることで、自らの中に自制心を持って、それを拒否することを選択したいと想います。

私があなたと同じ歳の頃、養母である「おばあちゃん」を撮っているとどうしようもなく彼女に触れてみたくなりました。8ミリをまわしながら私は彼女の頬に触れてみました。その時、私の中に2人の自分が存在していました。冷静に世界を見つめる客観的な私と、おばあちゃんの肌触りを直接感じている主観的な私です。このふたつの存在、主観と客観を持つことこそが、表現者たる資質を獲得することに他ならないと感じていました。その感覚を手に入れた私は、そのあとファインダーを覗いてフィルムカメラのシャッターを押しながら見えるものの固有名詞を叫び始めます。「空」「雲」「犬」「えんどう豆」「おばあちゃん！」 こうして私は世界を存在させてゆきました。名前をつけるということは、世界にそれらを存在させるということだったのです。あれから30年近くが過ぎ、今日、あなたとの時間を共有している自分がここにいます。そして「河瀬直美」という名前を持って、あなたに認識してもらっているなら幸いです。

さて、あなたが今いる場所にはどんな光景が見られますか？

あなたのまなざしは、何を見て、何を描いてゆくのでしょう。

その未来は明るいですか？

この自由な学びの場で存分に生きてください。これからたくさんの人に出会い、たくさんの本を読み、様々なことに挑戦していくのでしょう。見た景色、聞こえた音、匂い、味、肌触り、そこから生まれた感情を大切に、どれだけ小さかろうとあなた自身の想像力をもって真理を見つけるたった一つの窓の存在を確かめてください。どこまでも美しいこの世界を自由に生きることの苦悩と魅力を存分に楽しんでください。

この度はご入学おめでとうございます。

校友会会長祝辞

東京大学校友会会長

宗岡正二 さん

只今、ご紹介頂きました宗岡でございます。東京大学校友会を代表致しまして、東京大学に入学された皆様方に、心からお祝いを申し上げたいと存じます。また、入学生のご家族の皆様方にも、重ねてお祝いを申し上げます。本日は誠におめでとうございます。

まずもって、長引くコロナ禍の中で、このように入学式を執り行うことができましたことは、藤井総長はじめ学内の関係者の皆様方のご尽力によるものと心から感謝を申し上げたいと存じます。

新入生の皆さんは、この春の東京大学入学と同時に、全員が東京大学校友会の新たな仲間になられました。校友会会長として、新会員の皆さんを心から歓迎致します。

さて、ここで皆さんに東京大学校友会を少し紹介させて頂きたいと思います。東京大学校友会は、団体会員と個人会員からなる全学同窓組織であります。団体会員は、学部・学科、運動部・サークルなどの同窓会、国内外の各地における地域同窓会等々、310もの団体からなり、そして、個人会員は、すべての在学生、卒業生・修了生と教職員、合わせて20数万人で構成される、極めて大きなグローバル・コミュニティであります。

東大校友会の具体的な活動と致しましては、毎年10月のホームカミングデイを始めとする卒業生向けのイベントのみならず、近年は、

入学同期の学部生と卒業生との交流イベントや、就職活動を控えた在学生と卒業生との座談会等、在学生を支援する活動も拡充してきております。こうした東大校友会の世代や国籍を問わないコミュニティで、是非とも、皆さんの在学中ないし留学中、さらには卒業後も長きにわたり、東京大学の仲間との交友を広げて頂きたいと思います。

さて、次に、簡単に私の自己紹介をさせて頂きたいと思います。私は、およそ半世紀前の1970年に農学部農業経済学科を卒業し、鉄鋼メーカーである当時の新日本製鐵に一期生として入社致しました。社長・会長を経て、現在、日本製鉄 相談役を務めております。大学で柔道部におりましたことから、この日本武道館は、学生時代に選手として試合に臨んだ場所でもあり、また、不祥事に揺れた全日本柔道連盟の立て直しを要請され、2013年から4年間、全日本柔道連盟会長を務めた際には、全日本柔道選手権大会を会長として主催致した場所でもあります。このように、この入学式の会場は、私にとりましても誠に馴染みの深い会場であります。

さて、これから皆さんは、教養学部の前期課程に進まれるわけですが、比較的自由な時間のあるこの時期に、リベラル・アーツ、とりわけ教養としての歴史を学んでいただきたい。そして、多くの良書にも親しんで頂きたいと思います。

何千年にも亘る人類の歴史において、我々は多くのことを学んで参りました。先人たちが幾多の問題にどう取り組み、成功したのか、或いは失敗したのか、各々の時代の思想や英知の結集を歴史は私たちに教えてくれています。そして、歴史を深く学べば学ぶほど、人間の本質、人間の強さ・弱さ、賢さ・愚かさ、そしてリーダーに求められる真の資質は人格や胆力であることを私たちに教えてくれています。

欧米社会においてリーダーに求められてきたのは、欧米の騎士道精神の根幹を成す「身分の高い者は身分に応じて果たさなければならない社会的責任と義務がある」という「ノブレス・オブリージュ」の精神であります。

日本においても、新渡戸稲造が、この欧米の「ノブレス・オブリージュ」に通ずる道徳律として、格調高い英文で「武士道」を書き上げ、世界的なベストセラーとなりました。当時のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトは、この「武士道」を読んで、大いに感銘を受け、日露戦争の講和に尽力することとなったと言われております。

新渡戸稲造は樋口一葉の前の5千円札の肖像となっていたことでも有名ですが、1883年に東京大学に入学した、私どもの大先輩で、その後、第一高等学校校長、東大教授を経て、国際連盟事務次長に就かれた真の教育者・国際人であった方です。先ほどの著書「武士道」の中で、新渡戸は、武士道は正義（正しいこと）、勇気（その実行）、仁（慈愛）を中核とした道徳律であり、欧米社会の「ノブレス・オブリージュ」にも通じ、品格の形成を重んじる点で、武士道とキリスト教とは親和性があることを説き明かしたと言われております。

皆さんは、これから皆さんが進む分野において、将来、この国のみならず、国際的なリーダーとなることが大いに期待される人達であります。皆さんには、知力、気力、体力に加え、人としての倫理観をも併せ持った、万国共通の真のリーダーになってもらいたいと思います。

皆さんには、この「ノブレス・オブリージュ」の精神を心に刻み、これからの4年間を過ごして頂きたい。色々な事柄を学び、多くの人と出会い、視野を広げ、知性と感性に加え、品性をも磨いて頂きたい。また、2022年入学同期生同士の温かい仲間意識を醸成して頂きたい。皆さんが素晴らしい東大生、東大卒業生としての人生を送られるよう、東大校友会もお手伝いして参りたいと考えております。

最後になりますが、皆さんの東京大学への入学を心からお祝い申し上げます。皆さんが本日、東京大学に入学できたのも、皆さんの努力だけで掴んだものではありません。これまで導いて頂いた高校までの恩師の先生方、そして、これまで皆さんを育み、支えてくれたご両親・ご家族に感謝するとともに、入学できた幸運にも心から感謝する、そうした謙虚な気持ちを忘れないでもらいたい。そして、皆さんが心豊かな人間に成長して頂くことを心から祈念致しております。改めまして本日は誠におめでとうございます。

入学生総代宣誓

文科二類

呉 徳朗 さん

穏やかな春の訪れを感じ始めた今日というよき日に、令和四年度の入学生として、伝統ある東京大学の一員となれますことを、入学生一同大変嬉しく思います。

本日は、未だ新型コロナウイルス感染状況が落ち着かぬ中、感染対策に配慮した上で、ここ日本武道館で式を挙行していただき、誠にありがとうございます。また、この場をお借りして、これまで私達を応援し、支えてくださった家族・友人をはじめとする周囲のすべての方々に感謝の意を表したいと思います。

さて今、世界に目を向ければ戦争、感染症、環境問題や飢餓など、国内では少子高齢 化や所得格差など、私達は国内外を問わず様々な困難に直面しています。このような混 沌とした社会の中で求められるのはどのような人物か。私は広範で深い教養と、人を惹きつける豊かな人間性を備えた人であると考えます。そして、東京大学で展開されている、文系・理系の枠組みにとらわれず幅広い分野を学習し、多面的な視野の獲得を目指す前期課程と、一人一人の興味や適性に応じて、専門的な知識を深める後期課程から成るカリキュラムを積極的に活用し、主体的に学ぶ姿勢を持つことは勿論のこと、藤井総長をはじめとする教職員の皆様方や優秀な仲間から様々なことを吸収し、自己研鑽に励む過程でこそ、社会で必要とされる素養を身につけることができるのです。

最後に、私達は学問探究の蓄積と最先端の研究が併存する知の拠点である東京大学の一員であることの喜びと自覚を胸に、多くの点で未熟であることを謙虚に受け止めつつ、勉学だけではなく、部活・サークル活動・学園祭や学外活動など様々な経験を積み、社会において指導的役割を果たせるよう日々邁進していくことをここに誓い、新入生の挨 拶とさせていただきます。

令和４年度大学院入学式総長式辞

東京大学大学院に入学および進学されたみなさん、本日はまことにおめでとうございます。ご家族や関係者の皆様もさぞお喜びのことと思います。心からお祝いを申し上げます。

この春から、みなさんは、自分が所属する研究科の専攻や研究所に通学することになります。東京大学には本郷・駒場・柏のメインキャンパス以外にもさまざまな施設が存在します。研究教育活動の拠点は全国 15 都道県にまたがっており、そこにはスーパーカミオカンデのある岐阜県飛騨市の神岡宇宙素粒子研究施設や、東日本大震災で大きな痛手を負った後に再建された岩手県大槌町の国際沿岸海洋研究センターなども含まれます。本学のすべての施設を足し合わせると東京ドーム約 70 個分にもなり、その 99% が木々で覆われていることをご存知でしょうか。北海道・千葉・埼玉・愛知などに広大な演習林があるからですが、世界的に見ても演習林、海洋、宇宙に関する研究所、農場や医学部などをすべて備える総合大学は珍しい存在です。みなさんには本学の特性・資産を存分に活用し，それぞれの分野で世界のリーダーシップを担うにふさわしい成果をあげていただきたいと思います。

東京大学は、国連主導の国際キャンペーンである「Race to Zero」へ、日本の国立大学として初めて参加しました。これは、2050 年までに温室効果ガス排出量実質ゼロを達成するための行動を、世界に呼びかけるものです。カーボンシンクとして機能する演習林を活用しながら、都市部キャンパスの省エネ化や脱炭素への転換を進めることで、本学自体のカーボンニュートラルを実現してゆきたいと思います。グリーントランスフォーメーション（GX）は、社会全体で取り組むべき課題ですので、新たな知を創出できる大学の役割は非常に大きいと考えています。

東京大学は自律分散型の巨大なコミュニティで、約 11,000 名の教職員、14,000 名の学部学生、そして 15,000 名の大学院生から構成されています。このコミュニティの構成員はもちろん、さまざまな回路を通じて構築されてきた内外の人的ネットワークも、本学の最大の財産です。ただ、この 2 年間、新型コロナウィルスの感染拡大に伴い、海外への渡航が大きく制限され、その人的ネットワークの更新や拡大がとどこおっています。みなさんのなかには、海外留学の予定を延期せざるを得なかった人もいるでしょう。本日の入学式に参加できないままの海外からの留学生もいます。オンラインツールがずいぶん活用されるようになりましたが、それは人と人の直接対話を無用にするものでは決してありません。現在も続くオミクロン株の猛威による往来の制限のなか、私たちは、さまざまな工夫を重ねて世界との相互の再接続（reconnection）を試みてゆかねばなりません。本日、東京大学に入学したみなさんも、これからの大学院生活において、このコミュニティの新しいメンバーとして、自身の研究に邁進するとともに、国内外とつながり直す実践に積極的に加わってほしいと思います。

昨年、東京大学は、目指すべき理念や方向性をめぐる基本方針として、UTokyo Compass を作成しました。そのなかで、より良い未来を共有するためには、不公正や差別の理不尽、さまざまな社会的弱者の存在に対する鋭敏な感性をもち、課題と真摯に向きあう主体的な姿勢が必要であると述べています。その上で、未来を実現するプロセスにおいて「対話」を重視してゆくという方針を掲げました。対話とは、たんなる話し合いや情報の交換ではなく、知ろうとする実践です。知ろうとするからこそ、違いが見えてくるのです。そして違いがあり、多様であるところから始めるためには、相手の見ている世界を想像する能力を身につける必要があります。

たとえば、見ている世界の色そのものが違うこともあります。人間の目の網膜には 3 種類の錐体細胞があり、三色型の色覚をもっていますが、赤と緑に対応する光センサー遺伝子の多型により白人男性で約 8%の色覚異常があらわれるといわれています。一方で、霊長類以外のほとんどの哺乳類が錐体細胞を二種類しかもたない二色型で、この視覚の変化が進化とも関わっていることが知られています。

ところで、二色型と三色型が混在する霊長類であるクモザルを使って、果実採食成功率（注：果物を採って食べる、その成功率のこと）の違いを調査した、おもしろい研究があります。本学の新領域創成科学研究科の河村正二先生のグループの研究です。緑色の葉から赤系の果実は見分けやすいので、食べる果実もとりやすいだろうという単純な予想に反して、三色型色覚が果実採食において必ずしも有利ではないという結果が得られています。これは、熟れた果実を見分けるには、明るさのコントラストが最も利いているためであると考えられ、たとえばカモフラージュをする昆虫などの捕食には二色型の方がより有利であることも明らかになっています。識別に使われるのは、色合いや明るさのコントラストや輪郭への敏感さなど様々であり、また嗅覚など視覚以外の感覚も成功率に関与しそうであることがわかってきました。色覚の多型は、二色型、三色型に単純に分けられず、いくつかのタイプがあることが知られており、生物学的には、そうした多様なタイプの個体がいることは集団の生存にとってメリットでもあり

ます。

話を人間社会に戻しましょう。集団のなかの多数派を「標準」とし、そこから外れている人は少数派とし、あるいは何かが欠けていると考えてしまう傾向が人間の社会にはあります。そういうとらえ方は、見えやすいものだけを見るという安易な理解であり、世界の見方を広げる機会を自ら閉ざしているともいえます。たとえば、看板や掲示板をつくるときに、ついつい見分けやすいといわれている配色で塗り分けると、少なからぬ少数派がそのために不便を感じるということがよく起こります。色を見分けにくい人びとのために彩度や明度を工夫する、もしくは色なしでも理解できるようにデザインし、その上で強調のために副次的に色を添えるようにしようというのが、その反省にたった近年の流れです。知識では知っていても、身近に実践していくのは難しいことです。知識が行動に結びつくためには、自分とは異なる属性の人が見ている世界を想像する能力が必要となるでしょう。

多数派を「標準」とすることで、それ以外の少数派の利益や権利が後回しになってしまうことは、社会にはたくさんあります。

2019年に、英国のジャーナリストのキャロライン・ペレス（Caroline Criado-Perez）による*Invisible Women: Exposing Data Bias in a World Designed for Men*という本が出版されました。2021年に『存在しない女たち』というタイトルで日本語にも訳されています。

長い間、都市計画、交通システム、公衆衛生、政治参加、労働環境、製品開発など、多くの分野で女性に関するデータが著しく不足し、意思決定者はもちろん、設計プロセスを担当する人たちの大部分を、官民を問わず男性が歴史的に占めてきました。そのために、女性の意見やニーズを取り入れることなく、計画や開発が行われ、女性たちの生活や健康やキャリアに大きな被害が生じていることを指摘した本です。

担当者に男女差別等の悪意がなかったとしても、「気づかなかった」ことによって、少数派とされた決して少なくない人たちに不利益をもたらし、不具合を押しつけてしまうことがあるということです。たとえば、スマホのサイズです。画面の大きなものがどんどん開発されています。見やすくて男性の手にはちょうどよいかもしれませんが、女性には大きすぎて不都合なことがあるとも聞いています。また被験者が男性に偏ったデータをもとに開発された医薬品、平均的な男性をモデルにしたダミー人形だけを使っての車のシートベルト開発、さらには災害時の復興住宅にキッチンのない住宅を建ててしまったという事例までがあるとなると、苦笑では済まされなくなります。人は、そこに存在していない人びとの便宜や不都合には気づきにくく、不公正や違和感に思いがいたりにくいのです。

こうした無意識のバイアスをなくすにはどうすべきか。自分から声をあげることも大切です。意思決定の場に参加し、対話をすることが必要です。このとき他者の言葉や存在を受容しないと、対話にはなりません。そこでは、他者の声に耳をかたむけることの重要性が浮かびあがってきます。声の大きな多数派の都合だけが通りやすくなっていないかをチェックすることは、いろいろな属性の人が参加しやすい仕組みを作りあげていくうえでも、重要なことです。

残念なことですが、東京大学の構成員分布がダイバーシティに乏しいことは長年指摘されており、その改善が大きな課題となっています。この点については、まだまだ発展途上ではありますが、現状がどのようなことを見えにくくしているのか、大学院生としてキャンパスに集うなかで意識してみてください。見えやすいものに惑わされず、聞こえにくい声に耳を澄まし、自分の理想をあきらめず、他者の思いとふれあう対話の能力を身につけていくことが、将来、社会の中核を担うみなさんには強く求められています。

道はひとつではありません。用意された正解にどれだけ早くたどりつけるかを競っていた受験のための勉強とは異なる、問いや選択肢そのものを自分で創りあげることが、とりわけ大学院では求められます。ここで議論してきた、多数派と少数派という分け方自体が、社会の多様な立場や属性の人びとを単純な二項対立に落としこんでしまう危険性から自由ではないのだ、とも考えられます。

二項対立への単純化に陥らないためには、どうしたらよいでしょうか。たとえば、男性と女性という区分の理解をめぐって、古来、さまざまな試みがなされてきました。その一つが、文学作品を通して異なる性の立場を経験してみる実験です。かつて、英国の詩人コールリッジ（Coleridge）は「偉大なる精神は両性具有的でなければならない（A great mind must be androgynous）」と述べましたが、多くの文学者が、他の性からの視点を取り込む試みを繰り返してきました。

英国の作家ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）の作品に『オーランドー（Orlando）』という小説があります。青年貴族オーランドーは、三十歳で深い眠りに落ち、目が覚めると女性に生まれ変わります。興味深いのは、女性となった主人公が女性の衣装をまとうことで、自分の心よりも、周囲の対応や視線が一変する体験をする、その戸惑いや不安の描写です。オーランドーが360年も長生きをするという設定になっているのは、そうした変化で気づくことには表面的でない深い意味があり、長い時間をかけて理解し受け止めていく必要性が象徴されているとも言えます。

時間をかけて理解することの意義において、あらためて注目したいのが、「ネガティブ・ケイパビリティ（Negative capability）」です。これは英国の詩人キーツ（Keats）の言葉で、すぐには解決できない事柄を受けとめて向かいあい、不可解さや不確かさに耐えて取り組み続ける能力を意味します。帚木蓬生（ははきぎほうせい）は、著書『ネガティブ・ケイパビリティ　答えの出ない事態に耐える能力』（朝日新聞出版、2017年）のなかで、ネガティブ・ケイパビリティのことを「性急に証明や理由を求めずに、不誠実さや不思議さ、懐疑のなかにいることができる能力」であると述べています。これは、短時間での解決や、即時の反応といったスピード感が求められる今日、あらためて注目すべき見方でしょう。

UTokyo Compassが重視する「対話」とは、

ただ自分から話しかけることではありません。相手の声に耳を傾けなければなりません。それは、時に理解しがたいことがあっても切り捨てずに向かいあう態度であり、ある意味で「ネガティブ・ケイパビリティ」に通じます。そうした態度は、研究上の未知の課題に直面したときにも役立つでしょう。みなさんも、これからの研究や生活でなかなか答えが導き出せず、悩むこともあるはずです。そのような時には、友人や教員、あるいは未知の人びとの声に耳を傾ける事も必要になるでしょう。「ネガティブ・ケイパビリティ」の可能性を折に触れて思い出し、粘り強くいろいろな問題に取り組んでいただければと思います。

2月の終わりに突然起こった理不尽な軍事侵攻は、誰もが望んでいなかった破壊や悲劇、あたりまえの日常生活の喪失が広範に、また強引に引き起こされてしまう、世界秩序の脆さをあらわにしました。この状況は、日常的な対立がたかまって戦争にいたるのではなく、武力の行使という戦争状態こそが、互いの対立を強め、頑なものにする、さらには人びとの不幸や憎しみを増大させ、問題の解決をいちじるしく困難なものにしてしまうということを、私たちにあらためて思い起こさせました。だからこそ、被害の拡大を防ぐ観点からも早期の平和的解決が強く望まれる一方、学術の実践を通じて、非常時が強いるさまざまな不幸からの脱却に、いかに貢献できるかが、いま大学に問われているのです。厳しい対立状況のなかでも、本日述べてきた「相手の見ている世界を想像する能力」、そして「理解しがたいことがあっても切り捨てずに向かいあう態度」を大事にしつつ、対話や交流の実践が果たす役割をあらためて見つめ直すことが求められます。

東京大学は、いま困難のなかにある学生や家族や研究者や関係者のみなさんを支援するため、特別受け入れプログラムを開設しました。同時に「東京大学緊急人道支援基金」を立ち上げ、支援の輪を広げつつあります。

こうした取り組みは、東京大学自身もまた「世界に開かれ、自由な知的探求の空間を構築する」という、その使命を果たすために、未知の人びとの声に耳を傾け、粘り強く取り組んでいく、その第一歩であることに他なりません。

ご存知の通り、近年、日本の研究基盤が弱くなっているのではないかと懸念されています。国の財政難に伴い、若手研究者の安定的ポストが不足していると言われており、大学院博士課程への進学率も2000年に17%だったのが、2018年には9%にまで減少しています。しかし、これからの社会に、若い研究者の柔軟な発想による新たな科学技術の推進は不可欠です。本学としても、大学院生のみなさんへの支援を充実させてゆかなければならないと考えています。 その一つが、昨年度から始まった高度人材育成プログラムであるSPRING GXです。これは、社会全体でGX実現に向けて活躍する人材を、あらゆる分野に規模感をもって輩出することを目的としたプロジェクトです。東京大学はGXをより広く捉え「社会の変革」と位置づけることで、理工系に限らず全学の大学院生を対象とし、毎年600名に人材育成プログラムの提供および経済的支援を行います。こうした制度を活用して研究に没頭する時間を確保していただければと思います。気候変動や生物多様性、貧困の問題など人類に共通する地球規模の課題解決には、各々の専門知だけでなく、分野を横断するような広い視野からの探究も必要です。みなさんがこれから行う研究においても、ぜひグローバルシチズン（地球市民）の一員としての視点を忘れないでいてください。

大学院入学まことにおめでとうございます。みなさんのこれからの活躍を期待しています。

研究科長式辞

経済学研究科長
星 岳雄

東京大学大学院に入学されたみなさん、おめでとうございます。また、入学者のみなさんを支えて来られたご家族、友人の方々、今日はオンラインでご覧になっていると思います。お祝いを申し上げます。さらに、みなさんがこうして学問を究めるために大学院に進学するきっかけを作ってくれた多くの先生方がいらっしゃると思います。そうした大学時代、高校時代、あるいはもっと前の先生方にも、お祝いを申し上げると同時に、ここまで皆さんを導いて頂いたことに感謝したいと思います。

私自身も、もう40年ほど前になりますが、この大学の経済学の大学院に入学しました。ただし、その頃は大学院にはこのような立派な入学式はなかったと思います。ただ自分の所属する研究科に行って、学生証を受け取っただけのような気がします。

私の場合はその大学院にも一年ほど在学しただけで、アメリカのマサチューセッツ工科大学（MIT）の大学院に移り、そのままアメリカで就職して、三年ほど前に東大に赴任したので、これから東大で学位を取得して頂きたいみなさんを前に話すのは気が引けるのですが、研究者になろうというみなさんに何か参考になるのではないかということを、40年近い研究者としての経験から話したいと思います。

自分の研究生活を振り返ってみて、重要だったと思われることが四つあります。一つは、偶然のめぐりあわせということ、二つめは他

人とのネットワークということ、三つめは他人との競争と協力ということ、そして最後は何事も簡単にわかった気にならないということです。順番に説明します。

最初に、偶然と思われる出来事がその後の人生を左右するというのは、みなさんもたぶん経験があることで、いまさら言うまでもないと思われるかも知れません。私の場合は、日本経済を理解するということを研究の中心にしてきましたが、そのきっかけがそもそも偶然でした。大学の一年生の時になりますが、履修したいと思っていた教養科目の最初の授業が休講になって、ただその日はキャンパスに来る用事があったので、同じ時間に開講されていた統計学という授業に行きました。確率分布とか統計量とかいう難しい話かと思えば、社会に関する統計の歴史から話が始まって、たいへん興味深いものでした。その授業を教えていた中村隆英先生は、経済統計の専門家で、日本経済や歴史の研究でも有名な方であるということを後で知りました。それ以来、統計学を応用して、実際の経済を分析していくのに興味を惹かれ、中村先生の他の授業や演習も履修して、経済学の大学院に進んで、最終的には日本経済を中心に研究をすることになりました。

重要だと思うことの二番目は、他の人との関係、ネットワークというものです。また、私の経験から一例をあげると、同じ教養学科の友人で日本経済新聞社の当時データバンク局と言ったデータ分析の部門に就職した猿山純夫さんという人がいました。いまも、マクロ経済モデルの専門家として活躍されていますが、東大の大学院時代、彼の誘いで日経データバンク局でデータ分析の手伝いをやるようになりました。MITに行ってからも、日経データバンク局の方々との関係は続きました。MIT時代に、同級生と一緒に日本経済の研究を始めたのですが、日経の方々に企業データを使わせてもらえないか相談したところ、許して頂いて、分析を始めることができました。この同級生はアニル・カシャップといって、いまはシカゴ大学の有名な経済学者ですが、日本経済に関する共同研究はいまも続いています。

三番目は、競争と協力の大切さということです。研究者の世界も競争が激しいところで、特にアメリカには世界中から優秀な研究者が集まってくるので、競争も厳しくなります。ここで強調したいのは、他の研究者と競い合うことによって、自分がどこで比較的優れた能力を持っているのか、ということがわかるということです。すると、違う分野で強みを発揮する人達と協力しやすくなります。アメリカの経済学の大学院は、日本にくらべて競争も激しいですが、助け合って一緒に勉強するということも盛んで、その協力関係が将来も共同研究をやったりして続いていくという傾向があります。自分一人で研究するよりも、他の人と協力した方が、論文の出来も良くなるということがあって、私の場合も、引用回数の多い論文というのはほとんどがアニル・カシャップを始めとする様々な人達との共著です。

研究者にとって重要なことの四つ目は、簡単にわかった気にならないということです。新しい発見というのは、往々にして、多くの人が当たり前だと思っていることを疑うことから始まります。研究者として成功するためには、ほとんどの人が信じて疑わないことを疑う能力が重要になるということです。これは研究に限らず、他の分野、たとえばビジネスの世界でも同じだと思いますが、なかなか難しいものです。皆さんの多くもそうだと思いますが、成績が良かった人には、特に難しいことです。日本の少なくとも高校までの勉強では、先生がいうことに疑問を持たずに、物事を早く理解する能力の方が有用だからです。私もこの点では、成功した場合よりも失敗した場合の方が多いと思います。

比較的うまくいったと思われる経験を一つだけあげます。私が日本経済を研究し始めた当時の社会科学の主流の考え方は、一言で言えば日本特殊論で、西洋で発展してきた経済学などの社会科学では日本を説明できないというものでした。その裏返しとして、日本を研究しても経済学の発展には役立たない、というのが経済学での主流でした。その頃、もう30年以上前になりますが、日本の特殊性の典型例だと思われていた系列と呼ばれる企業の集団が、当時発展してきた情報の経済学が注目する、資金の貸し手と借り手の間の非対称情報の問題を軽減する仕組みとして理解できるということを指摘した論文を書きました。すると、日本のデータを使うことによって、欧米のデータだけでは判別が難しかった、企業の内部資金の量によって設備投資額が制約される理由を検証できる、という論文です。もちろん共著の論文でしたが、常識的な考え方をしないことによって新しい発見をすることができた、私の数少ない成功例の一つかと思います。

以上、私自身の経験に照らして、研究者として重要な四つのことについて話しました。繰り返すと、偶然を大事にすること、人的なネットワークを大切にすること、競争から自分の比較的強いところを発見して仲間と協力すること、そして何事も疑ってかかることの四つです。これらが、みなさんのこれからの研究にどれくらい役に立つかはわかりません。何よりも私の話をまず疑ってかかることが大事です。

いずれにしても、みなさんの研究生活が、楽しく実り多いものであることを願って、お祝いの言葉といたします。

祝辞

カブリ数物連携宇宙研究機構長
大栗博司

東京大学大学院に入学された皆さん、まことにおめでとうございます。またご家族や関係者の皆様にも心よりお祝い申し上げます。

今回の祝辞を準備するにあたり、学校教育法を読んでみたところ、大学院の目的は、「学術の理論や応用を研究しその深奥をきわめること」と「高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識や卓越した能力を培うこと」の2つであると書かれていました。

人類は何千年もの歴史の中で知識を積み重ね、それを共有の財産とし、文明を発達させてきました。大学院の目的のひとつは、それをさらに押し広げることです。そして、自らの力で新しい真理を発見したものだけに授けられるのが博士号です。本日は10分ほどお時間をいただきましたので、「価値のある発見をするには、どうすればよいか」についてお話しします。大学院に進まれる皆さんのご参考になれば幸いです。

皆さんは、小学校から大学までの教育によって、必要な知識や技術を身につけ、それを使って自分の頭で考える力を伸ばし、またその考えを言葉として伝える能力を鍛えてこられました。東京大学の大学院に入学が許された皆さんには、そのような素晴らしい能力が備わっています。では、皆さんのこの能力を、どのように使えば、価値のある発見ができるのでしょうか。

そのために必要なのは、第一に「問題を見つける力」です。大学までの教育では与えられた問題を解くことに主眼が置かれてきました。しかし、大学院では自ら問題を見つける力が求められます。では、「よい問題」とはなんでしょうか。

偉大な数学者アンリ・ポアンカレは、その著書『科学と方法』の最後の章で、「幅広い分野に影響を与える普遍的な発見にこそ価値がある」と述べています。普遍性の高い発見のすそ野は分野を超えて広がっていく。グーグル検索では、多くのウェブサイトからリンクされているページが上位に表示される、いわゆるページ・ランクが使われています。同じように、学問においても、より幅広い分野にリンクされる発見に価値があるというのです。

学問が進歩すると分野が分かれて専門化していきます。普遍性のある発見は、そのように分かれていった分野の間に新たなつながりをつけ、それらの発展を促す。そうした大きな流れの先には、社会に役に立つ応用も含まれます。それが、文明を発展させ、私たちの生活を改善する力ともなるのです。

新型コロナウイルス感染症の世界的大流行において、米国の感染症対策を指導したアンソニー・ファウチ博士は、科学誌『サイエンス』に寄稿した論説で、新型コロナ・ワクチン開発の歴史を振り返り、「このように高い効果のあるワクチンが迅速かつ効率的に開発され、数百万人の命を救った背景には、パンデミックに先立つ何十年も前から積み重ねられてきた、基礎、応用、臨床の幅広い分野に渡る、知られざる努力があった」と総括しています。私たちの生活は科学と技術によって改善されてきました。そこでは基礎から応用にひろがる研究のどれもが、重要な役割をはたしました。

また、私が教鞭を執っているカリフォルニア工科大学の前学長であったジャン＝ルー・シャモー博士は、ある講演で、「科学の研究が何をもたらすかをあらかじめ予測することはできないが、真のイノベーションは人々が自由な心と集中力を持って夢を見ることのできる環境から生まれることは確かである」と語っていました。それ自身に価値があり、真のイノベーションにつながる研究をするには、「自由な心と集中力」が必要だというのです。

一方で、皆さんは、大学院に在籍する数年の間に解決できる問題を見つけなければなりません。そのためには、まず、自身の学問分野を俯瞰し、その最先端が何なのかを見極める必要があります。研究する意義のある問題は、その先にあるはずです。そこに向かって努力をすれば新しい知識が得られ、学問の最先端を押し広げることができる。そのような、目標を見定めるのが、「問題を見つける力」です。

私は、米国の大学で30年ちかく、大学院生を指導してきました。大学院生が入学してくると、最初のプロジェクトでは、問題を見つけるところから論文を書くまで、実地で教えます。しかし、博士号を取得するまでには、自らの力で問題を見つけ、それを解く方針を立て、研究を遂行して、論文を仕上げられるようになることを目指しています。それを達成した学生だけに、博士号審査に進むことを許しています。

さて、問題を見つけても、それを価値のある発見につなげることは、簡単ではありません。そこで、もうひとつ重要になるのが、「粘り強く考え続ける力」です。

日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士は、その自伝に「未知の世界を探求する人々は、地図を持たない旅人である」と記しています。真理の探究はオアシスを求めて砂漠をさまようようなものです。地図がないので、どちらに行けばオアシスにたどり着けるのかもわかりません。そもそもオアシスがあるという保証もない。そこにはリスクもあります。

また時には、目標を修正することも必要になります。私は数年前に紫綬褒章をいただいた時に、他の受章者の著書を読んでから伝達式に臨みました。その時に読んだ、皆さんの

先輩である橋本和仁博士の本に、こんな話が書いてありました。橋本博士は太陽光で水を分解して酸素と水素を作る光触媒を研究されていました。いわば人工光合成で、成功すればエネルギー問題が解決します。ところが、この方法ではエネルギー効率が悪く実用にならないことがわかりました。「自分が一所懸命やってきた研究が現実に役に立たないことを突きつけられて」橋本博士は落胆します。しかしふとした機会から別な応用が見つかりました。この光触媒は有機物を分解するので、それをコーティングしておくと、汚れを分解し、微生物を不活性にできるのです。これが抗菌や防汚効果のある製品の開発につながりました。失敗を成功に変えた素晴らしい発見です。

計算されたリスクを取り、地図のないところに道を切り開き、これまで誰も知らなかったことを発見し、人類の知識を押し広げる。このような経験は、大学院修了後に、アカデミアに進まれる場合にも、また社会に出て活躍される場合にも、皆さんの自信と力になると信じています。

このようにお話ししますと、「大学院の研究とはなんと大変なことか」と思われるかもしれません。たしかに、自らの力で真理を発見し、知識を押し広げるのは、簡単なことではありません。しかし、私たちに深い喜びを与えてくれる行為でもあります。

古代ギリシアの哲学者アリストテレスは、14巻からなる著作『形而上学』を、「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」という言葉から始めました。私は、どのようなものでも、その機能が発揮できるときが幸せなのだと思います。そして、人間の場合には、アリストテレスが述べたように、より深く、より正しく物事を理解しようとすることが、本来の機能です。

大学院は、「知ることを欲する」という人間の本来の機能を存分に発揮できる場所です。私も、大学院生になり研究を始め、論文のカギとなるアイデアを得た時に、研究室からの帰り道に星空を見上げながら、「この答えを知っているのは世界に自分だけだ」という感動を味わったことがあります。こうした発見が、人類を迷信や偏見から解放し、この世界の理解を深めることで私たちの心を豊かにしてきました。しかも、それが長い目で見ると社会に役立つ。真理の探究とは、なんと素晴らしいことでしょうか。

先月、カリフォルニア工科大学の私の研究室で、大学院に合格した学生たちと面談する機会がありました。その中のひとりは、ウクライナからの留学生でした。「ご家族は」とおききすると、「皆、祖国を守るために戦っています」と答えました。そのような状況でも、理論物理学を研究するためにと大学院に進学してきたのです。

皆さんは、「学術の理論や応用を研究しその深奥をきわめる」もしくは「高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識や卓越した能力を培う」ために、人生の最も美しい時期のひとつを大学院で過ごすことを選ばれました。先人たちが築き上げてくれた平和と繁栄の中で、知のために生きることのできる機会を、大切にしてください。

ご入学、おめでとうございます。皆さんのひとり一人が、大学院で価値のある発見をされることを期待しています。

入学生総代宣誓

教育学研究科
小野裕太 さん

本日はこのような素晴らしい入学式を挙行していただき、心より感謝申し上げます。COVID-19の影響下、感染対策に配慮しながらも貴重な機会を用意して下さった藤井総長はじめ関係者の皆様のおかげで、今日この場に臨むことができました。また、私をここまで見守り育ててくれた両親や家族、友人や先生方に、この場を借りて改めて感謝を伝えたいと思います。

さて、大学院とは第一に、「研究」という役割を割り当てられた、知の最先端を追究する拠点であります。巨人たる先達の肩の上に乗り、僅かでも遠くを見通そうとすることが期待されるこの場所で、各々の為すべきことを為すために我々は知性と情熱を研ぎ澄ませなければなりません。しかし同時に、大学院は「学びの場」でもあります。

「学ぶ」という営みは多くの場合、能動的で蓄積的な営みとして捉えられます。すなわち、学習者が目標に向かって自発的に勉強に取り組み、知識や知見を蓄え身につけていく過程です。このような能動的で蓄積的な学びは、各人がそれぞれの専門分野で研究を進めていく上で不可欠な学びであると言えます。

しかしながら、大学院における「学び」が時に能動的ではなく受動的で、時に蓄積的ではなく破壊的であることを、私は期待しています。受動的な学びとはすなわち「教えられる」ないし「与えられる」ことを通じて訪れる学びであり、多くの場合予想もしていなかったこと、すなわち学ぼうと思ってはいなかったことが自分にもたらされるような学びです。そして、こうした学びはしばしば、これまでの知識や認識の体系と折り合いが悪いものをもたらします。

他方、破壊的な学びは、受動的な学びがもたらすような折り合いが悪いものと何とか折り合いをつけようとする際に訪れます。折り合いをつけるために、これまでの知識や認識の体系を壊して組み直すことを、破壊的な学びと呼ぶことができます。

ゼミや研究室を同じくする先輩や同輩、後輩との対話や議論を通じて、これまで思ってもみなかった発想や思考が自分に到来すること、先生の背中を見て必死でそれに倣うことで、いつしか研究者として大事なことが私に贈られていること、異分野の学生や先生との交流の中で、自身が属するディシプリンが暗黙のうちに前提としていた事柄の存在を知らされること。これから出会う受動的で破壊的な学びの可能性に、心躍らずにはいられません。

よって私は本学新入生を代表し宣誓します。能動的で蓄積的な学びと受動的で破壊的な学びを絶えず繰り返しながら、様々な他者と共に知の最先端を追究することをここに誓います。そして、これまでそのようにして学知を創り上げられてきた数多の先達に敬意を払い、彼ら彼女らに「教えられ」ながら日進月歩していくことを改めて誓い、宣誓の言葉の結びといたします。

撮影：尾関祐治

海と希望の学校 in 三陸

第19回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センターを舞台に、社会科学研究所とタッグを組んで行う地域連携プロジェクト―海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み―です。5年目を迎え、活動はさらに展開していきます。

ウニと希望の学校 in 三陸 ～名産から学ぶ、生き物の進化～

吉川晟弘 大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センター 地域連携研究部門 特任研究員

私は2020年12月から、「海と希望の学校 in 三陸」のプロジェクトに関わらせていただいています。私は学部生の頃から臨海実習が大好きで、いろいろな大学が主催する公開臨海実習にたくさん参加していました。そのため、いま臨海施設で海の生き物を使った実習プログラムに関われることがとても嬉しく、楽しく、やりがいのある毎日を過ごしています。今回は、そんな私が初めて担当した実習について紹介したいと思います。

✦✦✦✦

少し前のこととなってしまいますが、2021年9月28～29日にかけて、地域連携研究センターで宮古市立重茂中学校（以下、重茂中）2年生に向けての実習を行いました。その中で私が任されたのは、重茂の「海」を生物学の側面から理解するというプログラムであったため、重茂名産の「ウニ」の解剖実習を行うことにしました。三陸のなかでも岩手県宮古市重茂地区は、ウニの高い水揚げ量を誇る地域のひとつです。生徒の多くの家庭が漁業を営んでいることもあり、ウニは大変身近な水産物ですが、普段はウニの食べられる部分しか見ていないようです。そこで実習では、生き物としてのウニをじっくり観察して体の構造を理解してもらい、命をいただくことへの感謝につなげることを狙いとしました。

ウニの解剖の実演風景

ウニの解剖は、一般的な公開臨海実習では高校生や大学生を対象として行われるプログラムであり、中学生にはやや難しい作業です。そのためまず私が簡単に手順を説明した後で、解剖してもらうことにしたのですが、さすがは重茂の中学生、普段から触り慣れているらしく、抵抗なく手際よく解剖し、すんなりと、五放射状の骨格や、口やお尻の位置など、さまざまなウニの特徴を観察してくれました。

ウニは棘皮動物という動物門に含まれ、近縁グループには、ヒトデやナマコ、クモヒトデ、ウミシダ、ウミユリなどがいます。これらの近縁な動物と比較して、どこが同じか？何が違うのか？自分の目で実物や標本を確かめてもらいながら、ウニが歩んできた進化の道のりや、その生態を学んでもらいました。「ぜんぜん形が違うのに、ナマコと近い仲間なんだ！」とか「いつも食べているところって、星形に並んでいるんだ！」と驚いていたことが印象に残っています。これまでとは違う切り口で、名産を見てもらえたことと、その意外な側面などを学んでもらえたようで、私が担当したはじめての実習の目的はなんとか達成できたように思います。

今後も身近な海の生き物を使って、お家の人や友達に教えたくなるコネタを発見してもらえるような、ワクワクする実習プログラムを作りたいと思います。改善すべき点は多々ありますが、所員の方々の意見をもらいつつ、日々洗練させていきたいと思います。

顕微鏡で興味深そうに見る子供たち

慎重に、慎重に

綺麗に割れると、いつも食べているところ（生殖腺）が星形に並んでいるのがよくわかります

「海と希望の学校 in 三陸」公式 Twitter（@umitokibo）

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）

デジタル万華鏡 第28回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

総合文化研究科准教授 渡辺美季

沖縄の実情を示す田代安定資料

田代安定（1857-1928年）は、近代沖縄研究に先鞭をつけた植物学者・人類学者です。鹿児島城下に生まれ、上京して内務省博物館の博物館掛として勤務した後、1882-87年に農商務省や東京帝国大学（以下、帝大）の依頼を受け、三度にわたって沖縄（特に八重山地方）を訪問・調査し、多数の論文や報告書を執筆しました。そのうち14件が理学図書館に「田代安定資料」として所蔵されており、2021年10月よりデジタル公開が始まりました。いずれも1887年の調査の成果として帝大理科大学（理学部の前身）へ提出されたもので、琉球王国の滅亡（1879年）からまもない時期の沖縄の実情を知り得る貴重な資料です。

今帰仁間切親泊村のノロの勾玉

内容は宗教・言語・民俗・文学・地理など多岐にわたりますが、なかでも当時盛んに用いられ、後に廃れてしまう結縄の一種「藁算」（藁を結んで数量などを表す方法）に関する一連の調査記録は、その資料的価値の高さから、田代の死後、『沖縄結縄考』として刊行されました。また村落の祭司ノロ（祝女）についての調査記録（「沖縄島祝女佩用勾玉実検図解」）には、勾玉などの祭具が詳細に図解され［上図］、沖縄の祭祀・信仰をモノから考える手がかりを与えてくれます。

田代は後半生を台湾で過ごしましたが、近年、国立台湾大学図書館で田代の稿本などが大量に発見され、デジタル公開されました。本学のデジタル資料と合わせて、研究のさらなる進展が期待されます。

上図に描かれた勾玉の原品（個人蔵、写真は沖縄県今帰仁村歴史文化センター提供）

https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/tashiro/page/home

蔵出し！文書館 The University of Tokyo Archives 第37回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介

家族とともに

当館では、様々な写真帖を所蔵しています。その多くは卒業アルバムや大学の記念アルバムですが、今回は、筆者イチオシの「同窓会」のアルバムをご紹介しましょう。

卒業・記念アルバムは、大学の建物や、その時の総長をはじめとする教師、生徒の個人写真、そして校内の建物の前や旅先での集合写真、という構成が一般的ですが、農科大学の同窓会組織「林友会」の、大正6（1917）年12月印刷『林友会員部会写真帖　第一輯』（F0025/S01/0027）は、少し趣向が異なります。なんと、その人とその家族、ひいては飼い犬や馬なども一緒に写っており、たいへんプライベートな一コマが公開されているのです。写真帖目次によると明治22（1889）年から大正4年までの卒業生が対象で、印刷時の大正6年当時、卒業から年数が経っている人は家族とともに、年数の浅い人は学生服姿で、という被写体の特徴的な傾向もあるようです。

中でも筆者がとくに興味を持ったのは、写真帖29頁に掲載されたこの写真です。明治39年卒業の岩崎氏は向かって左端の男性と推測できますが、この写真の主役は子供たち、とくに中央奥の琵琶を構えた少女ではないでしょうか。この琵琶、弦を通して結ぶ「猪の目」（少女の右腕の斜め下の部分）が4つ、棹（細い部分）には柱（フレット）が5つ確認できます。右腕が置かれた琵琶の胴の部分が白いことなどから、この琵琶は、明治後期から大正にかけて大流行した「筑前琵琶」と考えられます。胴の白い部分の素材は、桐です。右手がちょうど机で隠れているのが残念ですが、きっと撥を持っていたことでしょう。

とっておきの家族写真を提出したのかな？ などと想像しつつ、当時、享受されていた文化や日常の様子が展開されたアルバムの、一寸マニアックな楽しみ方をご紹介しました。　（学術専門職員・星野厚子）

東京大学文書館

ワタシのオシゴト 第191回

RELAY COLUMN

農学生命科学研究科・農学部経理課
予算・決算チーム（資産管理担当） 西村洋平

アルコール燃料で元気に動きます

書類は山積み

農学部では、生態調和農学機構、7つの地方演習林、牧場、水産実験所など、附属施設が全国各地にあり、広大な敷地を使用しております。

そのため、方々で土地の貸し借りの手続き、境界確認依頼や売り払い依頼だけでなく、不動産に関するトラブルなどもあり、それぞれの現地の教職員の皆様、本部事務の皆様と協力して対応しております。

この仕事に携わらなければ知ることはなかったであろう、ご近所様との関係や決して表に出ることがない東京大学のローカルでマニアックな歴史を知ることができる点、魅力かと思います。

実際に現場を見ることの重要性を認識しつつも、コロナ禍により、各附属施設を訪れることができておりませんでしたので、今年度こそはと考えております。

弥生キャンパスにおける研究等のためのスペース不足問題、田無キャンパスの整備や水産実験所の移転など、とりかかるべき課題は山積しておりますが、それぞれの業務が円滑に進むよう、努めて参ります。

※バイクの燃料はガソリンです

得意ワザ：雨雲を呼び寄せる
自分の性格：慎重だが隙が多い。入念だが抜け目が多い
次回執筆者のご指名：宍戸靖彦さん
次回執筆者との関係：前職でお世話になった先輩です
次回執筆者の紹介：頼れるダディ

ぶらり構内ショップの旅 第2回

ルヴェ ソン ヴェール駒場 @駒場キャンパス の巻

木々に囲まれたブラッセリー

緑豊かな駒場キャンパスの一角にあるフレンチレストラン、ルヴェ ソン ヴェール駒場（Lever son Verre は「乾杯」の意）。旧制第一高等学校の同窓会館を改修し、2004年にオープンしてから教職員や学生、そして近隣の方など多くの舌を楽しませてきました。プロヴァンスを彷彿とさせるオレンジを基調にした店内では、南仏で修行したシェフが腕を振るいます。

「フレンチというとかしこまったイメージを持つかもしれませんが、ここはカジュアルです。気負わずに、是非ドアを開けてみてください」と話すのはマネージャーの小川健太さん。

マネージャーの小川健太さん

日替わりランチは魚、肉、ラタトゥイユから選べるメインディッシュに、サラダブッフェと珈琲か紅茶がついて1100円（5月から1200円）。人気のサラダブッフェに並ぶ新鮮な野菜の数々は、シェフが直接市場から仕入れています。東京にある3店舗一括で仕入れることで、鮮度のいい野菜を安価で提供できるそうです。食欲旺盛な学生などは、締めの珈琲の後に、再び野菜をよそっているとか。他には、2420円のランチコースや女性に人気のデザート盛り合わせなどがあります。

コロナ禍で休業を余儀なくされた間には、オンラインショップを立ち上げました。お店の味を自宅で楽しめるフルコースのキットなどは、今でも外出を控えている人などの利用が多いそうです。昨年の10月に再開してから「一層おいしくなった」と声をかけてくれる人が多く、励みになっていると小川さんは言います。

約一年前に他店舗から異動してきた小川さんは、駒場店は雰囲気と環境が抜群にいいと話します。「都会にありながら、こんなに自然豊かで静かな環境があることに驚きました。外での食事が気持ちのいい季節に、テラス席でカジュアルフレンチを楽しんでみてください」

ランチ●11:00～14:30（L.O.）
ディナー●17:00～21:00（L.O.）

南仏で修業したシェフが作る品々は「どれを食べてもおいしい」と小川さん

https://leversonverre-tokyo.com/restaurant/komaba.html

インタープリターズ・バイブル　第176回

総合文化研究科 客員教授
科学技術インタープリター養成部門　小松美彦

コロナ禍における科学と政治

コロナ禍に見舞われたこの2年間を顧みれば、日本の関連施策は「人命か／経済か」を基準になされてきたといえよう。また、政府と専門家会議との対立もその基準をめぐっていたと見受けられよう。たとえば、最初の緊急事態宣言（2020年4月7日）にあって、政府は経済活動再開の観点から解除を急いだが、専門家会議は感染拡大防止の点からそれに抗した。しかも、同会議は、政府の諮問への答申や科学的助言にとどまらず、広く独自の政策的発信を行ったが、これも感染爆発への危機感に由来すると報じられた。

その後（20年6月24日）、専門家会議はそうした姿勢を「前のめり」と自省し、改善策を示して世に問うた。そこで科学論分野でも、専門家の権限や当為の検討などを通じて、政府と専門家会議の在り方が論じられてきた。だが、かような実践的な議論とともに、原理的な考察も必要であろう。すなわち、「政治と科学との関係そのもの」についての考察である。

この点に関しては、フランスの哲学者A.コント=スポンヴィルの卓見をまず参照するのがよい。紙幅の制約のため単純化すると、世の中は基盤から順に、「科学技術・経済」、「政治・法」、「道徳・倫理」の各層からなっており、政治・法が科学技術・経済の暴走を、道徳・倫理が政治・法の専制を、それぞれ制御する関係をなしている。ただし、いずれの階層も固有の領分をもっているため、ある階層の問題を他の階層に担わせることも、従わせることもできない。たとえば、科学理論の真偽を国会が多数決で決めることは暴挙であろう。コント=スポンヴィルは、このような領分の混同・転化を「純粋主義」と呼んで戒めている。

ところが、コロナ禍においては、純粋主義が公然となされている。科学的提言の評価が、少なくともその軽重の判断が、政治によって行われており、しかも、そこでは科学と経済とが比較考量されているのである。今その是非は問わないが、それが現実にほかならない。さらには、ここでいう科学とは、いわば真理の探究と提示のためのものであり、かの哲学者がそれと一括した生産力の発展手段としてのものではない。近年では等閑視されがちな両科学の異同も、再検討が必要なのである。

翻ってみれば、そもそも科学による感染症拡大防止とは、人命（個々人の命）を真の目的としているのだろうか。もしそうではないのなら、「人命／経済」であるかに見えた政治（政府）と科学（専門家会議）との真の対立軸は、はたして何であろうか。

科学技術インタープリター養成プログラム

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第30回

渉外部門
シニア・ディレクター　高橋麻子

春から始めるアニュアルギフト

新年度を迎え、新たなチャレンジとして「何か社会貢献をしてみたい」という声を聞きます。おすすめなのが、奨学金制度や研究プロジェクトへ毎月少しずつ寄付ができる継続寄付（アニュアルギフト）という方法です。

東京大学基金ではウェブサイトから、様々なプロジェクトへの継続寄付を申し込むことができます。“寄付のサブスク”とも言われる継続寄付の特徴やメリットをご紹介します。

①**少額から始められます**。1,000円以上で好きな金額と頻度（毎月、年1回、年2回）が選べます。ご自身の無理ない範囲で始めることができます。

②**手続きは最初の1回だけ**。変更や停止は、お申込み時に作成されたマイページからいつでも可能です。

③**寄付の使い道がわかります**。メールマガジンやウェブサイトの活動報告で、寄付先プロジェクトの最新情報や寄付の活用方法を知ることができます。

④**領収書はまとめて年1回**。1年分のご寄付の領収書をまとめて翌年2月上旬に受け取ることができます。領収書の紛失の心配もありません。

⑤**寄付金控除が受けられます**。継続寄付も東京大学へのご寄付として税法上の優遇措置の対象となります（確定申告が必要です）。

⑥**研究を深く知る機会も**。いくつかのプロジェクトでは、継続寄付者を対象にした独自の特典や報告会イベントへの招待があり、研究者と交流する機会もあります。

⑦**安田講堂にあなたの銘板を**。毎月1,000円のご寄付を25年続けると累計寄付金額が30万円となり安田講堂に銘板を掲示させていただきます。いつかご家族と見にこられるといいですね。

一滴の水がやがて大河になるように、小さな応援もたくさん集まることで、学生や研究者の夢を支えることができます。また寄り添い喜びを分かち合うことが、自身の励みとなり豊かな気持ちにしてくれます。

この春、アニュアルギフトで新しい社会貢献を始めてみませんか？

かわいい「シュレ猫」の会員証がもらえるプロジェクトもあります（光量子コンピューター研究支援基金）

継続寄付の詳細はこちら→
https://utf.u-tokyo.ac.jp/htd/annual

※ウクライナ侵攻を受けた「学生・研究者の特別受入れプログラム」の一助として、東京大学基金では緊急人道支援基金の寄付募集を開始しました

トピックス

全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles, Notices）に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
3月14日	総合文化研究科・教養学部	超域文化科学専攻の三浦篤教授が令和 3 年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞
3月16日	本部社会連携推進課	2021 年度　体験活動プログラム報告会を開催
3月16日	工学系研究科・工学部	物理工学専攻 齊藤英治 教授が「日本学士院賞」を受賞
3月16日	本部広報課	女性が発芽する大学になるために｜ダイバーシティと東大　06 ｜高橋美保先生の巻
3月17日	大気海洋研究所	附属地球表層圏変動研究センター長の阿部彩子教授に日本学士院賞授賞が決定
3月22日～4月5日	本部広報課	「UTokyo Compass」が拓く大学の新世界（藤井輝夫×岩村水樹×今泉柔剛×佐藤健二）、UTokyo 映画祭 2022［オープニング対談］中田秀夫監督×竹峰義和教授、東大映画研究 Now ／マチュー・カペル／「淡青」44 号
3月23日	本部広報課	Nature Index における東京大学の国際共同研究への貢献
3月23日	医学系研究科・医学部	構造生理学部門　河西春郎教授が恩賜賞・日本学士院賞を受賞
3月24日	本部総務課	令和 3 年度東京大学学位記授与式を挙行
3月25日	本部総務課	令和 3 年度東京大学卒業式を挙行
3月25日	リサーチ・アドミニストレーター推進室	東京大学 URA（UTRA）ネットワークシンポジウムを開催
3月28日	本部広報課	［総長メッセージ］濱口竜介監督作品『ドライブ・マイ・カー』の受賞
3月29日	本部国際戦略課	第4回JIEPPシンポジウムを開催「大学による日印交流事業の成果と展望」
3月30日	本部国際戦略課	ウクライナ侵攻を受けた「学生・研究者の特別受入れプログラム」の実施
3月30日	経済学研究科・経済学部	経済学研究科 武田晴人名誉教授が日本学士院賞を受賞
3月30日	本部広報課	ロシアのウクライナ侵攻の背景を読み解く
3月31日	本部渉外課	東京大学緊急人道支援基金の寄付募集を開始
3月31日	総合文化研究科・教養学部	柳澤実穂准教授がMichèle Auger Award を受賞
4月1日	本部学生支援課	御殿下グラウンドの改修工事（人工芝張替）が完了しました
4月1日	工学系研究科・工学部	中條麟太郎さん（B3）が「令和3年度 東京大学総長大賞」を受賞
4月1日	本部広報課	3Dマップで可視化されるウクライナの被害
4月4日	広報戦略本部	「漫画界の言語の壁」に挑むAI研究者出身起業家　Entrepreneurs 12
4月6日	大学総合教育研究センター	クラスサポーター申し込み受付を開始
4月7日	本部総務課	（本郷）入学式挙行に伴う赤門の開門について
4月8日	工学系研究科・工学部	サウジアラビア　プリンセス・ヌーラ大学と包括的交流協定を締結
4月8日	教育学研究科・教育学部	国際学術交流会を実施

CLOSE UP　部局長交代のお知らせ

4月1日付で部局長の交代がありました。

	新部局長	前部局長
大学院法学政治学研究科・法学部	**山本隆司**	大澤 裕
大学院理学系研究科・理学部	**星野真弘**	（再任）
大学院薬学系研究科・薬学部	**三浦正幸**	船津高志
大学院数理科学研究科	**斎藤 毅**	時弘哲治

	新部局長	前部局長
大学院情報理工学系研究科	**須田礼仁**	（再任）
公共政策学連携研究部・教育部	**飯田敬輔**	大橋 弘
宇宙線研究所	**中畑雅行**	梶田隆章
先端科学技術研究センター	**杉山正和**	神崎亮平

CLOSE UP　御殿下グラウンドの改修工事（人工芝張替）が完了　（本部学生支援課）

新しい人工芝を確かめるみなさん

本郷キャンパスの御殿下グラウンドについては、2021年3月に照明の更新、2022年1月から人工芝張替の改修工事をおこない、3月末にリニューアルしました。3月31日には、藤垣裕子理事（学生支援担当）・大久保達也理事（施設担当）・津田敦社会連携本部長にご出席いただき、グラウンドを利用する運動部の学生のみなさんとともに、お披露目見学会を開催しました。新しいフィールドには、従来のサッカーのほか、アメリカンフットボールとラクロスの競技ラインが敷設されました。また、環境に配慮し、表面温度抑制効果があるカラーチップを上部充填剤として使用しています。

CLOSE UP　URA ネットワークシンポジウムを開催　（リサーチ・アドミニストレーター推進室）

【総合討論～URAと協働するには～】
上段左より、本郷教授、合原特別教授、岸副学長、高橋教授、古宇田プリンシパルURA

2月28日、URAとの協働を考えるシンポジウムを開催しました。リサーチ・アドミニストレーター推進室室長である齊藤延人理事・副学長の挨拶に続き、藤井輝夫総長から「協働するためには対話を重ね、相互に十分な理解と信頼関係を醸成していくことが重要」と期待が述べられました。その後、新澤裕子URAが本学URAの特徴を活かした情報共有の取り組みなどを紹介しました。後半には、史料編纂所の本郷恵子教授、農学生命科学研究科の高橋伸一郎教授、合原一幸特別教授、岸利治副学長が登壇し、古宇田光プリンシパルURAの進行で総合討論を行いました。「本学は所帯が大きすぎて大胆な連携が少ないので、その連携構築をURAネットワークに期待する」（本郷）、「構成員のフラットな関係構築と相互理解を深め、互いに褒め合う雰囲気をURAが創出して欲しい」（高橋）、「教員や職員といった複数のネットワーク間をさらにつなぎ、シナジー効果をもたらすのがURA」（合原）、「専門以外にもう一つ必要とされる何かを目指し、それに取り組む姿勢をURAに求める」（岸）といった議論が行われました。最後に、URA推進室副室長の佐藤岩夫執行役・副学長が総評を述べてシンポジウムを締めくくりました。

CLOSE UP　中條麟太郎さんが東京大学総長大賞を受賞　（工学系研究科・工学部）

令和3年度の総長大賞を受賞した中條さん。LearnWiz Oneは参加者の主体性を引き出しながら意見集約を促すことのできる教育プラットフォームです

国際工学教育推進機構　吉田塁研究室LearnWiz プロジェクトメンバーの中條麟太郎さん（文学部3年）が令和3年度東京大学総長大賞を受賞しました。題目は「東京大学におけるオンライン教育支援の経験から生まれた教育プラットフォーム『LearnWiz One』の開発とその評価としてのEdTech分野における世界最大の国際コンテスト部門優勝」で、吉田研究室において開発しているEdTech「LearnWiz One」の取り組みによるものです。「東京大学総長賞」では初めてのEdTechに関する受賞でした。

中條さんは、オンラインにおける大規模なアクティブラーニングの実現を目指す吉田研究室の LearnWiz プロジェクトの中で、教育プラットフォーム「LearnWiz One」の開発を主に行いました。「LearnWiz One」は2022年1月に開催されたThe Global EdTech Startup Awards 世界大会における研究開発部門第一位となり、その結果も含めた一連の活動が高く評価されました。「今後も、より良い教育の実現を目指して、ひいてはより良い社会の実現を目指して、活動を続けていきます」と中條さんはコメントしています。

令和3年度学生表彰「東京大学総長賞」その他の受賞者

【課外活動、社会活動等】

藏下隼人（教養学部3年）	世界ベンチプレス選手権 2021 第3位入賞およびコロナ禍を克服する学生ボディビル・パワーリフティング連盟代表としての指導的活動
伊佐碩恭（医学部5年）、井上卓哉（数理科学研究科修士1年）、髙谷悠太（理学部4年）	第44回国際大学対抗プログラミングコンテスト(ICPC:International Collegiate Programming Contest) 世界大会 Invitational 優勝・金メダル受賞
横山果南（医学部5年）	米国財団法人野口医学研究所主催「野口エッセイコンテスト」特別賞及び東京都医師会主催「医学生懸賞論文 Student Doctor プラタナス大賞」大賞受賞と多岐にわたる一連の社会活動

【学業】

森脇可奈（理学系 博士3年）	宇宙論的シミュレーションと機械学習を用いた宇宙大規模構造の解析
鎌田満希（文学部4年）	南蛮漆器の聖龕に関する一試論
割鞘奏太（工学部4年）	オーセティック構造およびボロノイ分割の幾何学特性を用いた研究開発群
辻村真樹（工学系 修士2年）	微生物型ロドプシンにおける光駆動イオン輸送 機構の解明
今野直輝（理学系 修士2年）	生命の進化と発生の過程を網羅的に明らかにする情報解析技術
中里一星（農学生命科学 修士2年）	シロイヌナズナのオルガネラゲノムの標的一塩基置換
内藤龍彦（医学系 博士4年）	深層学習を用いた大規模ゲノムデータ解析法の開発と疾患の原因遺伝子変異解明への応用
松浦孝弥（工学系 博士3年）	アナログ測定量のデジタル化に基づく量子情報 処理の研究
金子直嗣（総合文化 博士3年）	歩行の運動観察と運動イメージにおける皮質および脊髄興奮性の変調

※「学内広報」では広告掲載を受け付けています。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。→本部広報課（03・5841・2031）

七徳堂鬼瓦

リスクの許容:「安全・安心」再考

コロナ禍での「安全・安心」なオリンピックの開催について、多くの議論がなされた。議論の中で釈然としない点が出てきたので、まずは「安全・安心」に対する国の考えを知ろうと思い、webで検索したところ、「安全で安心な世界と社会の構築に向けて（2005、日本学術会議）」という報告書がヒットした。報告書では、客観的基準で決まる「安全」と主観的・心理的基準で決まる「安心」の違いを論じた上で、安全を確保する組織と人々の間の信頼関係が人々の安心に繋がるとしている。さらに、現実的かつ合理的な目標として、「絶対安全＝ゼロリスク」から「リスクの許容」への転換が不可避との指摘がなされている。報告書を読んで、釈然としなかった理由が、「リスクを許容したオリンピック」に対して、主催者側が「安全・安心なオリンピック」を標榜した点にあると分かってきた。

コロナ禍でオリンピックを開催した場合、人々が様々な程度の危険に晒される。開催のメリットも人それぞれだ。その状況下でリスクと有用性を天秤にかけ、リスクを許容した結果、オリンピックが開催された。「ゼロリスク」から「リスクの許容」に転換すると、絶対安全だから安心できるという考え方、つまり「安全・安心」をセットにした通常の考え方が最早できない。この場合、主催者側が行うべきことは、リスク分析・回避対策を通して人々との間の信頼関係を築くことだ。その信頼関係に裏付けられて、人々の側から「納得できた」と評価するのが「安心」の意味するところとなる。通常の意味合いで「安全・安心」という言葉を使い続けると、リスクを許容したという事実自体が曖昧になってしまう。

オリンピックに限らず、リスクを許容せざるを得ない状況は今後も訪れるだろう。大学でも、コロナ禍での授業の実施形態などで、リスク許容が余儀なくされつつある。リスク許容の判断をする組織は、同時に、多様な構成員に配慮して安全を確保する責務を負う。その際、リスクを許容したという事実を直視した上で、「許容できるリスクのレベル」について議論を重ねること以外に、組織と構成員の信頼関係を築く道筋はないだろう。

小屋口剛博
（地震研究所）

東京大学広報室
no.1557　2022年4月22日

〒113-8654　東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報課　TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp